小品集

テルトゥリアヌス
藤遥　制作

殉教者たちへ　1〜3章　牢という隠れ場

1:1 祝福された人々よ、殉教者となるべき人々よ。女主人である母なる教会はその乳房から、兄弟たちはひとりひとり自分の財産から、あなたがたのいる牢に肉の糧を届けています。その糧に交えて、わたしからも何かを受け取ってください。霊をも育てるのに役立つものです。1:2 肉を太らせて、霊を飢えさせるのは、益になりません。それどころか、弱いものが世話を受けるなら、もっと弱いものも、同じくないがしろにされてはなりません。わたしは、あなたがたに語りかけるほどの者ではありません。1:3 それでも、最も熟達した剣闘士たちでさえ、励ましを受けるものです。その師範や親方だけでなく、素人や、用もないだれかれまでが、遠くから励まします。そのため、群衆の中から投げかけられた助言が役に立ったことも、たびたびありました。1:4 ですから、祝福された人々よ、何よりもまず、あなたがたと共に牢に入られた聖霊を、悲しませてはいけません（エペソ四・三〇）。聖霊が今あなたがたと共に入っておられなかったなら、あなたがたもきょう、そこにいることもなかったからです。ですから、聖霊がそこであなたがたと共にとどまってくださるように努めなさい。そうすれば、聖霊はあなたがたを、そこから主のもとへ導いてくださるでしょう。1:5 確かに、牢もまた悪魔の家で、悪魔はそこに自分の家の者たちを閉じ込めています。しかし、あなたがたが牢に来たのは、悪魔をその家の中でも踏みつけるためです。外ではすでに、悪魔と組み合って踏みつけていたからです。1:6 ですから、悪魔に、「やつらはおれの領分にいる。卑しい憎しみや、離反や、仲間どうしの争いで、やつらを試してやろう」と言わせてはなりません。悪魔は、あなたがたの前から逃げ去ればよいのです。呪文で動けなくされた蛇や、煙でいぶし出された蛇のように、身を縮め、しびれて、自分の奥底に潜んでいればよいのです。1:7 悪魔が自分の王国で、あなたがたを互いに戦わせるほど、うまく事を運べることがありませんように。かえって悪魔が、守りを固め、一致で武装したあなたがたを見いだしますように。あなたがたの平和は、悪魔にとって戦いだからです。教会の中でこの平和を持たない人々が、牢にいる殉教者たちに、それを請い求めるのが習わしになっています。1:8 ですから、あなたがたは、この平和を自分たちのうちに持ち、温め、守らなければなりません。それは、もしそういうことがあれば、ほかの人々にもこの平和を与えられるようにするためです。

2:1 ほかの精神の妨げは、あなたがたの両親と同じく、牢の敷居まであなたがたを見送って、そこで別れたことにしなさい。そこから先、あなたがたは世界そのものから切り離されたのです。まして、世とその事柄からは、なおさらではありませんか。2:2 世界から切り離されたからといって、うろたえてはなりません。実際、世界そのものこそむしろ牢だと考え直すなら、わたしたちは悟るでしょう。あなたがたは、牢に入ったというより、牢から出たのです。2:3 世界は、もっと大きな闇を持っています。それは人々の心を盲目にします。世界は、もっと重い鎖をかけています。それは人々の魂そのものを縛ります。世界は、もっとひどい汚れを吐き出しています。人々の情欲です。最後に、世界は、もっと多くの罪人を閉じ込めています。つまり、人類全体です。2:4 そして、世界が待っているのは、地方総督の裁きではなく、神の裁きです。それだけに、祝福された人々よ、あなたがたは、牢からいわば守りの場所へ移されたのだと考えなさい。そこには闇がありますが、あなたがた自身が光です。そこには鎖がありますが、あなたがたは神にあって解き放たれています。2:5 そこには陰気なにおいが立ちこめていますが、あなたがたはかんばしいかおりです。裁き手が待たれていますが、あなたがたは、裁き手たちをさえ裁くことになるのです。世の実りを恋しがる者は、そこで悲しめばよいのです。キリスト者は、牢の外にいるときでさえ、世を捨てています。牢の中では、牢をも捨てているのです。2:6 世の外にいるあなたがたが、世のどこにいようと、変わりはありません。また、あなたがたが人生の楽しみをいくらか失ったとしても、もっと大きなものを得るために何かを失うのは、商いというものです。神が殉教者たちを招いておられる報いについて

は、まだ何も言いません。2:7 さしあたり、世での暮らしと牢での暮らしそのものを比べてみましょう。霊が牢で得るものは、肉が失うものより多いのではないでしょうか。それどころか、肉は、教会の配慮と兄弟たちの愛によって、当然受けるべきものを失いません。その上、霊は、信仰にいつも役立つものを手に入れるのです。2:8 あなたは、よその神々を見ません。その像に出くわすこともありません。異邦人の祝いの日に、人ごみに交じるだけで加わってしまうこともありません。汚らわしい煙のにおいに打たれることもありません。見世物の叫びにも、祝う者たちの残酷さや狂乱や淫らさにも、打ちのめされることはありません。あなたの目が、公然と情欲にふける場所にぶつかることもありません。あなたは、つまずきからも、誘惑からも、悪い思い出からも、さらには迫害からも、離れていられるのです。2:9 牢がキリスト者に与えるものは、荒野が預言者たちに与えたものと同じです。主ご自身も、たびたび隠れ場に退いて過ごされました。もっと自由に祈るため、世から身を引くためでした。そして、ご自分の栄光を弟子たちに示されたのも、人のいない所においてでした。2:10 牢という名を取り去って、隠れ場と呼びましょう。体は閉じ込められ、肉は捕らわれていても、霊には、すべてが開かれています。霊によってさまよい歩きなさい。霊によって散歩しなさい。木陰の走路や長い柱廊ではなく、神へ至るあの道を、自分の前に置きなさい。2:11 その道を霊によって歩くたびに、あなたは牢の中にいないことになります。精神が天にあるとき、すねは足かせの中で何も感じません。精神は人間全体を連れ歩き、望む所へ運んでいくのです。2:12 そして、『あなたの心のある所に、あなたの宝もある』のです（マタイ六・二一）。ですから、わたしたちの心は、宝を持ちたいと願う所に置きましょう。

3:1 祝福された人々よ、今は、牢がキリスト者にとってもつらいものだとしておきましょう。わたしたちは、誓いの言葉に答えたとき、そのときにもう、生ける神の兵役に召されたのです。兵士はだれも、ぜいたくを携えて戦いに来たりはしません。寝室から戦列に進み出ることもありません。広げて綱で張った天幕から出ていくのです。そこには、あらゆる厳しさと、居心地の悪さと、味気なさがあります。3:2 兵士たちは平時のうちから、労苦と不便によって、戦争に耐えることを身につけます。武具を着けて行進し、練兵場を駆け回り、堀を掘り、亀甲の陣を組み、汗を流すのです。すべては汗によって成り立っています。それは、体も精神も、移り変わりにおびえないためです。日陰から日なたへ、日なたから寒さへ、肌着から鎧へ、静けさから叫びへ、安らぎから騒ぎへの移り変わりです。3:3 同じように、祝福された人々よ[1]、このつらさがどんなものであれ、精神と体の力を鍛えるためのものと考えなさい。あなたがたは、良い競技に臨もうとしています。そこでは、生ける神が競技の主催者、聖霊が練習場の長です。永遠の冠は、天使の本性という賞です。国籍は天にあり、栄光は世々限りなく続きます。3:4 ですから、あなたがたの監督であるキリスト・イエスは、あなたがたに霊によって油を塗り、この競技の場に連れ出されました。そして、競技の日より前に、あなたがたをもっと自由な境遇から引き離すことを望まれました。もっと厳しい扱いのもとに置いて、あなたがたのうちで力が強められるようにするためです。3:5 実際、運動選手たちも、もっと厳しい規律のために隔離されます。力を築き上げることに専念するためです。彼らは、ぜいたくからも、おいしい食べ物からも、楽しい飲み物からも遠ざけられます。強いられ、苦しめられ、疲れさせられます。鍛錬で骨を折れば折るほど、勝利への望みも大きくなるのです。3:6 使徒は、『彼らは朽ちる冠を得るためにそうする』と言います（第一コリント九・二五）。永遠の冠を得ようとするわたしたちは、牢を自分たちの練習場とみなします。あらゆる不便でよく鍛えられて、裁きの座という競技場に引き出されるためです。力は厳しさによって築かれ、柔弱によって崩されるからです。

訳注

1 写本では、ここは女たちへの呼びかけになっている。

殉教者たちへ　4〜6章　人の栄光のために耐えた人々

4:1 主の教えによって、わたしたちは知っています。肉は弱く、霊は熱しているのです（マタイ二六・四一）。ですから、主が肉の弱いことを認められたからといって、自分を甘やかさないようにしましょう。主が先に、霊は熱していると言われたのは、どちらがどちらに従うべきかを示すためだったからです。つまり、肉が霊に、弱いものが強いものに仕え、肉もまた霊から強さを受けるためです。4:2 霊に、肉と共通の救いについて語り合わせなさい。もはや牢の不便ではなく、競技と戦いそのものを思いながらです。肉はおそらく、重い剣や、高い十字架や、獣の猛りや、火による極みの刑罰や、拷問での刑吏のあらゆる手管を恐れるでしょう。しかし霊には、自分と肉の前に、こう示させなさい。それらはつらいことではあっても、多くの人が平然と受け入れ、それどころか、自分から求めさえしたのです。名声と栄光のためにです。それも男たちだけでなく、女たちもでした。祝福された女たちよ、それは、あなたがたも同じ女として恥じないようにするためです。4:3 自分の意志に導かれて、剣で自らの命を絶った人々を、ひとりひとり数え上げれば、長くなります。女たちのことなら、すぐ手もとに例があります。ルクレティアは、暴行を受けて辱められると、身内の人々の目の前で、自分に短刀を突き立てました。自分の貞潔に栄光をもたらすためです。4:4 ムキウスは、自分の右手を祭壇の上で焼きました。その行いが名声によって語り継がれるためです。哲学者たちのしたことは、さほどのことではありません。ヘラクレイトスは、牛の糞を体に塗って、自分を焼きました。エンペドクレスも、アエトナ山の火の中に飛び込みました。ペレグリヌスも、つい先ごろ、火葬の薪の中に身を投じました。女たちでさえ、火を軽んじたのですから。ディドは、最愛の夫の死後、結婚を強いられたとき、そうしました。ハスドルバルの妻もそうです。カルタゴがすでに燃えていたとき、彼女は子供たちと共に、祖国を焼く火の中へ飛び込みました。夫がスキピオに命乞いをするのを見ないためです。4:5 ローマ人の将軍レグルスは、カルタゴ人に捕らえられました。そして、自分一人が多くのカルタゴ人の捕虜と引き換えにされることを拒み、敵のもとへ戻されるほうを選びました。そして、一種の箱に押し込められ、外から四方に打ち込まれた釘に刺し貫かれて、いくつもの十字架の苦しみを味わったのです。4:6 ある女は、喜んで獣を求めました。しかも、牛や熊よりも恐ろしい毒蛇をです。クレオパトラは、敵の手に落ちないように、それを自分の体にあてがいました。しかし、死の恐れは、拷問の恐れほど大きくはありません。4:7 ですから、アテナイの遊女は、刑吏には屈しました。彼女は陰謀を知っていたので、そのために僭主に責めさいなまれました。それでも、共謀者たちを明かしませんでした。そして最後に、自分の舌をかみ切って、僭主の顔に吐きかけました。拷問がこの先も続いても、もう自分には何の効き目もないと、僭主に思い知らせるためでした。4:8 ラケダイモン人のもとで、今でも最大の祭りがディアマスティゴーシス、すなわち鞭打ちであることは、よく知られています。この儀式では、祭壇の前で、身分の高い若者たちがみな鞭で打たれます。そばには親や身内が立ち、耐え抜くように励ますのです。4:9 体が屈するより、むしろ命が鞭に負けて尽きるなら、それはいっそう大きな誉れ、栄光とみなされるからです。ですから、地上の栄光に、体と精神の力によって、それほどのことが許されているとします。人の称賛という報いのために、剣も、火も、十字架も、獣も、拷問も軽んじるほどです。それなら、わたしは言うことができます。これらの苦しみは、天の栄光と神からの報いを得るためなら、取るに足りません。4:10 ガラス玉が、本物の真珠と同じ値でしょうか。それなら、ほかの人々が偽物のために払うのと同じだけのものを、本物のために喜んで払おうとしない人が、いるでしょうか。

5:1 今は、栄光という動機は省きます。残酷さと責め苦とのこうした戦いのすべてを、人々のあいだでは、熱中や、いわば精神の病までが、すでに踏みつけてきました。武器への熱中は、どれほど多くの暇な者を、剣の勝負に身売りさせているでしょうか。5:2 確かに、彼らは熱中から、獣そのものを相手にするところへ

まで降りていきます。そして、かまれた跡や傷あとのおかげで、自分がもっと美しくなったと思うのです。また、ある者は、火にまで身を売りました。燃える衣を着たまま、決まった距離を走り通すためです。5:3 ほかの者は、獣闘士たちの鞭のあいだを、よく耐える背で歩き通しました。祝福された人々よ、主がこうしたことを世にお許しになったのは、理由のないことではありません。わたしたちを、今は励まし、あの日には恥じ入らせるためです。もしわたしたちが、真理のために苦しんで救いに至ることを、しり込みするならです。ほかの人々は、むなしさのために、それを熱心に求めて滅びに至ったのです。

6:1 しかし、熱中から出たこうした不屈の例は、省きましょう。人間の境遇そのものを見つめることに、目を転じましょう。望まない者にも起こるのが常であることを、不屈の心で迎えるべきかどうか、そうした事柄からも教えられるためです。6:2 実際、火事が人を生きたまま焼いたことは、何度あったでしょうか。獣が、自分の森で、また檻を逃げ出して町のただ中で、人をむさぼり食ったことは、何度あったでしょうか。どれほど多くの人が、強盗には剣で、敵には十字架で殺されたでしょうか。それも、まず責めさいなまれ、それどころか、あらゆる辱めを受け尽くしたうえでのことです。6:3 神のためにはためらう苦しみでも、人のためになら耐えられない者は、いません。このことについては、今の時代を、わたしたちへの証拠としてもよいでしょう。どれほど多くの、どれほど高い身分の人々が、思いもよらない最期を遂げていることでしょう。生まれにも、地位にも、体にも、年齢にもそぐわない最期です。しかも、一人の人間のためにです。その人に背けば、その人自身によって、その人の側に立てば、その人の敵によってです。

見世物について　1〜3章　造られたもののゆがみと詩篇の言葉

1:1 神のしもべたちよ、知りなさい。信仰のどんなあり方、真理のどんな道理、教えのどんな定めが、世のほかの迷いと並んで、見世物の快楽をも取り上げるのかを。今まさに神に近づきつつあるあなたがたは、知りなさい。すでに神に近づいたと証しし、告白したあなたがたは、改めて知りなさい。だれも、知らないために、あるいは知らないふりをして、罪を犯すことがないためです。1:2 快楽の力は、それほど大きいのです。無知を引き延ばして、見る機会にしてしまいます。良心を腐らせて、知らないふりにしてしまいます。そのどちらにも、異教徒の考えが、まだだれかを甘く誘うかもしれません。彼らはこの問題で、わたしたちに対して、こんな理屈をこねるのが常です。「外から目や耳に与えられるこれほどの慰めが、あなたの精神と良心のうちにある宗教を妨げることは少しもない。人が楽しんでも、神が怒ることはない。神への畏れと敬いを損なわないかぎり、ふさわしい時と場所でそれを楽しむのは、罪ではない」1:3 ところが、わたしたちがいま示そうとしているのは、まさにそのことです。こうしたものが、まことの宗教にも、まことの神へのまことの従順にも、どのように合わないかです。また、こう考える人々もいます。キリスト者という、いつでも死ねる種族は、快楽を断つことで、こうした頑固さへと仕込まれているのだ、と。命をつなぎとめる綱のようなものを断ち切って、命をたやすく軽んじられるようにするためだ、というのです。もう自分で用のないものにした命を、惜しまないためだ、というのです。こうして、このことは神の定めによるのではなく、むしろ人の思慮と見通しによって決められたのだと思われています。1:4 なるほど、これほどの快楽にふけり続けたまま、神のために死ぬのはいやだった、というわけです。とはいえ、たとえそうだったとしても、これほど適切な思慮なのですから、頑固さも、これほどの教えには従順であって当然でした。

2:1 さらに、だれもがこうも言い立てます。「すべては神が造り、人に与えたものだ」。これは、わたしたちも説くとおりです。「しかも、善い作者のものはみなそうであるように、どれも善いものだ。見世物を組み立てているものも、みなその中に数えられる。たとえば、馬や獅子、体の力や声の美しさだ」2:2 「だから、神自身が造ったものから成るものが、神に無縁だとも、敵だとも思われるはずがない。神の敵でないものを、神を拝む者の敵と見なしてはならない。無縁でもないのだから」2:3 「むろん、見世物の場の建物そのものも、石も、割り石も、大理石も、柱も、神のものだ。神がそれを、地の備えとして与えたのだから。そればかりか、そこで行われることさえも、神の天の下で行われている」と、人は言います。2:4 人の無知は、自分をなんと賢い理屈屋だと思っていることでしょう！　とりわけ、世の喜びや楽しみのうちの、こうしたものを失うのを恐れるときにはそうです。実際、この一派から人を遠ざけるのは、命を失う危険より、むしろ快楽を失う危険であることが多いのです。2:5 死なら、愚か者でさえ、負っているものとして恐れません。快楽なら、賢者でさえ、与えられたものとして軽んじません。愚か者にも賢者にも、生きる甲斐は快楽のほかにないからです。2:6 神が万物の造り主であることは、だれも否みません。その万物が善いもので、しかも人にゆだねられていることもです。自然がおのずから教えることを、知らない人はいないからです。しかし、彼らは神を深くは知りません。自然の権利によって知るだけで、親しい者の権利によっては知りません。遠くから知るだけで、近くからは知りません。ですから、どうしても知らないのです。神が、ご自分の造られたものをどう扱うよう命じ、また禁じておられるかを。また、神の造られたものの使い方をゆがめるために、反対の側から敵対する力が何であるかも知りません。よく知らない方については、その意志も、その敵も、知りようがないからです。2:7 ですから、すべてがだれによって造られたかだけでなく、だれによってねじ曲げられたかをも見なければなりません。何の用のために造られたかは、何の用のためでないかが分かれば、分かるからです。2:8 損なわれたものと損なわれていないものとは、大きく違います。造り主と、ゆがめる

者とが、大きく違うからです。そもそも、悪のどんな種類も、神の造られたものから成っています。異教徒でさえ、疑いのない悪として禁じもし、罰しもする悪です。2:9 たとえば、人殺しが、鉄の刃や毒や魔術の呪縛で遂げられるとしましょう。鉄も、草も、天使も、等しく神のものです。しかし、造り主は、人を殺すためにそれらを備えられたのでしょうか。ところが実際には、ただ一つの根本の戒めで、人殺しのあらゆる種類を断っておられます。『殺してはならない』（出エジプト二〇・一三）。2:10 同じように、金、銅、銀、象牙、木など、偶像を造るために取られる材料があります。それをみな世に置かれたのは、世の造り主である神のほかに、だれでしょうか。しかし、それは、これらが神ご自身に背いて拝まれるためだったでしょうか。2:11 ところが、神の怒りを最も買うのは偶像礼拝です。神を怒らせるもので、神のものでないものがあるでしょうか。しかし、それは神を怒らせたとき、神のものであることをやめたのです。そして、やめたときに、神を怒らせたのです。人そのものも、あらゆる恥ずべき行いの張本人ですが、神の作品であるばかりか、神のかたちでもあります。それでも、体においても霊においても、自分の造り主から離れ去りました。2:12 わたしたちは、目を情欲のために、舌を悪口のために、耳を悪口の受け皿のために受けたのではありません。のどを大食の罪のために、腹を大食の仲間にするために受けたのでもありません。陰部をみだらな行き過ぎのために、手を暴力のために、足取りをさまよう暮らしのために受けたのでもありません。それとも、霊が体に植えられたのは、たくらみや欺きや不正を考えめぐらす場所になるためだったのでしょうか。2:13 わたしはそうは思いません。罪のないことを求められる神は、あらゆる悪意を憎まれます。また、これほどに考え出された悪をも憎まれます。そうであれば、神の造られたものはどれも、神が罪に定められる業に行き着くように造られたのではありません。それは疑いのないことです。たとえ、その業が、神の造られたものを通して行われるとしてもです。罪に定められる理由は、すべてここにあるからです。つまり、造られた者が、造られたものをゆがめて扱うことです。2:14 ですから、わたしたちは、驚くにも疑うにも及びません。わたしたちは、主を知って、主に敵対する者をも見抜きました。造り主を見いだして、ゆがめる者をも同時に捕らえました。人は神の作品であり、神のかたちであり、万物全体の持ち主でした。その人そのものを、ゆがめる者、敵対する者である天使の、あの力が、初めから、損なわれていない状態から突き落としたのです。その力は、人に属するものすべてをも、ゆがみへと変えて、造り主に背かせました。それは人と共に損なわれない状態に造られていたのに、人と共にゆがめられたのです。その力は、それが自分にではなく人に与えられたことを恨んでいました。そこで、まさにそのものの中で、人を神の前に罪ある者とし、また自分の支配を据えようとしたのです。

3:1 この知識を備えて、異教徒の考えに立ち向かったうえで、今度はむしろ、わたしたちの仲間の言い逃れのほうに向かいましょう。ある人々の信仰は、単純すぎるのか、細かすぎるのか、見世物を断つことについて、聖書からの典拠を求めます。そして、迷いの中に身を置いています。そのように控えることが、神のしもべたちに、はっきりと名を挙げて命じられてはいないからです。3:2 確かに、聖書には、はっきりとこう書かれています。『殺してはならない。偶像を拝んではならない。姦淫も欺きも犯してはならない』（出エジプト二〇・四～五、一三～一五）。しかし、同じようにはっきりと『戦車競走場に行ってはならない。劇場にも行ってはならない。競技も剣闘士の試合も見てはならない』と定められているところは、どこにも見いだせません。3:3 しかし、ダビデのあの最初の言葉が、こうした事柄にも当てはまることを、わたしたちは見いだします。ダビデは言います。『悪しき者の集まりに行かず、罪びとの道に立たず、疫病のような者の座にすわらなかった人は、さいわいである』（詩篇一・一）。3:4 この言葉は、あの正しい人、アリマタヤのヨセフをたたえたもののようにも見えます。主を殺そうと協議するユダヤ人の集まりと会合に、加わらなかったからです。それでも、神の聖書は、いつも広く及びます。今ある事柄の意味に沿って、教えを固めるところなら、どこにでもです。ですから、ここでも、この言葉は、見世物の禁止と無縁ではありません。3:5 この言葉は、当時のわずかなユダヤ人を『悪しき者の集まり』と呼びました。それなら、異教の民のこれほど大きな集まりは、なおさらではありませんか。異教徒は、当時のユダヤ人ほど悪しき者でも、罪びとでも、キリストの敵でもないというのでしょうか。3:6 それだけではありません。ほかの言葉も合っているのです。見世物の場でも、人は道に立つからです。

ぐるりとめぐる帯状の通路や、民衆の席を斜面に沿って下りながら区切る通り道を、人々は「道」と呼ぶのです。3:7 また、曲がり角にあって座るために設けられた所そのものも、「座」と呼ばれます。ですから逆に、こう言えます。どんな悪しき者の集まりにでも行き、どんな罪びとの道にでも立ち、どんな疫病のような者の座にでもすわる人は、不幸です。3:8 ある言葉が特定のことにも解しうるときでも、一般に言われたものと解しましょう。特定のことについて告げられた言葉にも、一般の意味を含むものがあるからです。神がイスラエルの人々に、教えを守るよう勧めたり、責めたりされるとき、それは確かにすべての人に向けられています。神がエジプトとエチオピヤに滅びを告げられるときも、確かに、罪を犯すすべての民に、あらかじめ裁きを下しておられるのです。3:9 罪を犯す民がみなエジプトであり、エチオピヤであるとすれば、それは種から類へ広げたものです。同じように、見世物はその起源からして、どれも『悪しき者の集まり』です。こちらは類から種へ当てはめたものです。

見世物について　4〜8章　起源と名と装いと場所

4:1 わたしたちが理屈をこねているだけだと、だれにも思われたくありません。そこで、わたしたちの印そのものの、いちばんの権威に向かいましょう。わたしたちは、水に入り、キリスト教の信仰を、その掟の言葉のとおりに告白します。そのとき、悪魔と、その行列と、その天使たちを捨てたことを、自分の口で証言するのです。4:2 では、悪魔とその行列とその天使たちは、何よりもまず、何のうちに数えられるでしょうか。偶像礼拝のほかにあるでしょうか。あらゆる汚れた悪しき霊は、そこから出ているのです。手短に言えば、そうなります。これについては、もう長くは論じないからです。4:3 ですから、見世物のしつらえ全体が偶像礼拝から成り立っていることがはっきりすれば、疑いなく、前もって決まることになります。わたしたちが洗いのときに、捨てたと証言したことは、見世物にも及ぶのです。見世物は、偶像礼拝を通して、悪魔とその行列とその天使たちに引き渡されているからです。4:4 そこで、一つひとつの起源を挙げましょう。それぞれが、世のどんな揺りかごの中で育ったかです。次に、いくつかのものの名を挙げます。どんな名で呼ばれているかです。次に、その装いを挙げます。どんな迷信で飾られているかです。それから、場所を挙げます。どんな守り神にささげられているかです。それから、技を挙げます。どんな創始者に帰されているかです。4:5 このうち偶像に関わらないものがあれば、それは偶像礼拝にも、わたしたちの捨てる誓いにも関わらないでしょう。

5:1 起源については、わたしたちの仲間の多くのあいだで、隠れていて知られていないことなので、深く調べなければなりませんでした。しかも、異教の文献の記録のほかに、手がかりはありませんでした。この事柄について書き物を著した著者は、たくさんいます。5:2 その人々によれば、遊戯の起源は次のように伝えられています。ティマイオスの伝えるところでは、リュディア人がアジアから移って来て、エトルリアに住みつきました。率いたのはテュレノスで、王位を争って兄弟に譲った人でした。そこで、彼らはエトルリアで、自分たちの迷信のほかの儀式と並べて、見世物をも、宗教の名のもとに設けたのです。5:3 ローマ人は、そこから技を持つ者たちを呼び寄せ、借り受けました。時期も、呼び名も借りました。こうして、遊戯（ルディ）は、リュディア人にちなんで呼ばれることになったのです。もっとも、ウァロは、遊戯を遊び（ルドゥス）から、すなわち戯れ（ルスス）から説きます。ルペルキも、遊んで走り回るので、遊ぶ者たち（ルディイ）と呼ばれていた、というのです。それでも、ウァロは、その若者たちの戯れを、祭りの日にも、神殿にも、宗教にも結びつけています。5:4 しかし、名の由来は、もうどうでもよいのです。事柄の由来が偶像礼拝でありさえすれば、それでよいからです。実際、リベラリア祭も、ほかの祭りと区別なく遊戯と呼ばれていましたが、その名ははっきりと父リベルの誉れを響かせていました。もともと、田舎の人々がリベルのために催したものだったからです。リベルのものとされる恵み、すなわち、ぶどう酒の恵みを示したことへの返礼でした。5:5 次に、コンスアリア祭と呼ばれた遊戯があります。初めはネプトゥヌスをたたえたものでした。人々は、同じ神をコンススとも呼ぶからです。続いて、ロムルスがエクイリア祭をマルスのために定めました。もっとも、コンスアリア祭もロムルスのものだと、人々は主張します。ロムルスがそれを、相談（コンシリウム）の神とされるコンススにささげた、というのです。その相談とは、彼が当時、兵士たちのために、サビニの乙女たちをさらって妻にすることを考え出した、あの相談のことです。5:6 さぞ立派な相談だったことでしょう。今でもローマ人自身のあいだで、正しく、許されたことなのでしょう。神のもとでも、とは言わないでおきます。これもまた、起源の汚点になるのです。悪から始まったものを、あなたが善いものだと思わないためです。それは、恥知らずから、暴力から、憎しみから始まりました。兄弟殺しの創始者、マルスの子から始まったのです。5:7 今も、戦車競走場の第一の折り返しの柱のそばに、あのコンススの祭壇が、地下に埋められています。そこには、こういう碑文があります。『コンスス

は相談において、マルスは戦いにおいて、ラレスは家の奥において[1]力ある者』。七月七日には公の祭司たちが、八月二十一日にはクィリヌスの祭司とウェスタの乙女たちが、その祭壇で供え物をします。5:8 次に、同じロムルスが、タルペイウスの丘で、ユピテル・フェレトリウスのために遊戯を設けました。ピソの伝えるところでは、それはタルペイウスの遊戯とも、カピトリウムの遊戯とも呼ばれました。その後、ヌマ・ポンピリウスが、マルスとロビゴのために遊戯を催しました（人々は、穀物のさび病にまで女神をこしらえたのです）。続いてトゥッルス・ホスティリウスが、続いてアンクス・マルキウスが、そのほかの者たちも、順に遊戯を設けました。5:9 どの偶像のために遊戯を設けたかは、スエトニウス・トランクィッルスの書に記されています。あるいは、トランクィッルスが資料を得た人々の書にです。しかし、偶像礼拝から出たという起源の罪を示すには、これで十分でしょう。

6:1 古い時代の証しに、後の時代も加わります。今の時代の名からも、起源の型を示しているのです。その名によって、両方の種類の遊戯が、どの偶像に、どの迷信にささげられたかが記されているのです。6:2 たとえば、メガレンセスの遊戯とアポロの遊戯があります。同じく、ケレス、ネプトゥヌス、ラティアリスのユピテル、フロラの遊戯もあります。これらは、みなで祝われます。ほかの遊戯は、皇帝たちの誕生日や祝いの日、公の慶事、町々の祭りに、その起源となる迷信の理由を持っています。6:3 その中には、遺言によって催される見世物もあります。個人の記念のために、死者を祭るのです。これもまた、昔に設けられたとおりです。遊戯は、初めから二つに分けられていたからです。聖なる遊戯と葬いの遊戯、すなわち、諸民族の神々のための遊戯と、死者のための遊戯です。6:4 しかし、偶像礼拝については、どんな名で、どんな呼び名のもとに行われても、わたしたちにとって違いはありません。わたしたちが捨てた、同じ霊たちに届くのであればです。死者のためであろうと、自分たちの神々のためであろうと、勝手にすればよいのです。彼らは、神々のためにするのと同じように、死者のためにもするのですから。どちらの側も、事情は一つです。偶像礼拝は一つです。偶像礼拝に対するわたしたちの放棄も、一つです。

7:1 ですから、両方の種類の遊戯は、起源が共通で、名も共通です。理由が共通だからです。そうであれば、装いも共通であるほかありません。自分たちを生み出した偶像礼拝の、全体に及ぶ罪から出ているからです。7:2 ただ、戦車競走の遊戯の飾り立ては、いくらか行列らしく華やかです。戦車競走にこそ、本来、行列という名がふさわしいのです。行列は先に立って進み、だれのものかを、それ自体で示します。像の列、肖像の群れ、車、神々の持ち物を運ぶ車、覆いのある車、玉座、冠、神々の装身具によってです。7:3 そのうえ、どれほどの儀式、どれほどの供え物が、その前にも、途中にも、後にも行われるか。どれほどの組合、どれほどの祭司職、どれほどの役職が動くか。それは、ダイモンの集まりが座を占めた、あの都の人々が知っています。属州では、力が乏しい分、手をかけずに行われます。それでも、どこの戦車競走もみな、あの都に帰すべきものです。求め、取ってくるもとの所から、汚れをも受けるのです。7:4 細い小川も自分の泉の、小さな若枝も自分の枝葉の、起源の性質を保っているからです。行列が豪勢か質素かは、どうでもよいことです。問題は、戦車競走場の行列が、どんなものであれ、神を怒らせるかどうかです。7:5 運ぶ像がわずかでも、その一つに偶像礼拝があります。神々の持ち物を運ぶ車が一台だけでも、それはやはりユピテルの荷車です。偶像礼拝は、みすぼらしく整えられていても、ほどほどにしか富んでいなくても、どれも同じです。その罪の出どころによって、豊かで、きらびやかなのです。

8:1 場所についても、予定どおり述べていきます。戦車競走場は、何よりもまず太陽神ソルにささげられています。その神殿は競走場の中ほどにあり、その像は神殿の破風から輝き出ています。露天に仰いでいる神を、屋根の下にまつるべきではないと考えたのです。8:2 人々は、最初の見世物はキルケが、自分の父とされるソルのために催したものだ、と言い張ります。そして、戦車競走場（キルクス）という呼び名も、キルケから出たと理屈をつけます。確かに、その魔女は、この名によって、自分が祭司として仕えていた者たちのために事を運んだのです。すなわち、ダイモンと天使たちのためにです。8:3 では、あなたは、この場所の姿のうちに、どれほどの偶像礼拝を見分けられるでしょうか。戦車競走場の飾りの一つひとつが、そのまま一つひとつの神殿なのです。卵の飾りは、カスト

ルの兄弟の誉れのためのものとされています。彼らが卵から、しかも白鳥になったユピテルから生まれたと信じて、恥じない人々がそうしているのです。8:4 イルカの像は、ネプトゥヌスのために水を吐いています。柱は、セッシア、メッシア、トゥトゥリナの像を支えています。セッシアは播くこと（セメンタティオ）から、メッシアは刈り入れ（メッシス）から、トゥトゥリナは実りの守り（トゥテラ）から名づけたものです。その前の三つの祭壇は、三組の神々に仕えています。大いなる神々、力ある神々、強き神々です。8:5 人々は、この神々をサモトラケの神々と同じだと考えています。オベリスクの巨大さは、ヘルマテレスの言うところでは、ソルに身を売るようにささげられたものです。その碑文も、出どころと同じく、エジプトから来た迷信です。ダイモンたちの集まりは、自分たちの大いなる母がいないとさびしかったのです。そこで、その女神がそこの水路を司っています。8:6 コンススは、前に述べたとおり、ムルキアの折り返しの柱のそばで、地下に隠れています。この柱もまた、偶像のものにされました。人々はムルキアを愛の女神だと言い、その場所に神殿を建てると誓ったからです。キリスト者よ、気づきなさい。どれほど多くの汚れた名が、戦車競走場を占めてきたかを。8:7 あれほど多くの悪魔の霊が占めた崇拝の場は、あなたには無縁です。場所については、ある人々の問いに先回りするため、論じ直す場所があります。「では、ほかの時に戦車競走場へ行ったら、汚れの危険があるのか」と、あなたは尋ねます。8:8 場所についての定めは、何もありません。見世物の集会所ばかりか、神殿そのものにさえ、神のしもべは、教えを危うくすることなく入ることができます。ただし、やむをえない、ほかに意図のない用件があって、それがその場所に特有の営みや務めに関わらないときに限ります。8:9 もっとも、通りも、広場も、浴場も、宿屋も、わたしたちの家そのものも、偶像のまったくない所ではありません。サタンとその天使たちが、世のすべてを満たしたのです。8:10 けれども、わたしたちが神から離れ落ちるのは、世にいるからではありません。世の罪に何か手を触れたときです。ですから、もしわたしが、供え物をささげる者、拝む者としてカピトリウムやセラピスの神殿に入るなら、神から離れ落ちます。見物人として戦車競走場や劇場に入るのと同じです。8:11 場所そのものが、わたしたちを汚すのではありません。場所で行われることが汚すのです。それによって場所そのものも汚される、とわたしたちは論じてきました。汚されたものによって、わたしたちは汚されるのです。それで、わたしたちは、こうした場所がだれにささげられているかを挙げるのです。その場所で行われることは、その場所をささげられた者たちのものだ、と示すためです。

訳注

1 この語は意味が定まらず、『集会において』とも読まれる。

見世物について　9〜13章　技と劇場と競技と剣闘士の試合

9:1 次に、戦車競走を催す技について述べます。馬の技は、昔は、ただ馬の背に乗って行う素朴なものでした。ふつうに使うかぎり、もちろん罪はありませんでした。しかし、遊戯に引き込まれたとき、それは神の賜物から、ダイモンへの務めに移ったのです。9:2 そこで、この種の技は、カストルとポルクスに割り当てられています。ステシコロスの伝えるところでは、メルクリウスがこの二人に馬を分け与えたのです。ネプトゥヌスも馬の神で、ギリシア人はヒッピオス（馬の神）と呼びます。また、つなぐ馬の数については、人々は四頭立てを太陽に、二頭立てを月にささげると定めました。9:3 さらに、こうも歌われています。『エリクトニオスが初めて、車と四頭の馬をあえてつなぎ、勝利者として、すばやく車輪の上に立った』。このエリクトニオスは、ミネルウァとウルカヌスの子です。それも、地にこぼれ落ちた情欲から生まれた子です。ダイモンの怪物です。いや、ただの蛇ではなく、悪魔そのものです。9:4 また、アルゴスのトロキロスが最初の車の作り手だとしても、彼はその作品をユノにささげました。ローマで初めて四頭立ての車を見せたのがロムルスなら、彼自身も偶像の中に数えられた、とわたしは思います。彼がクィリヌスと同じであるならばです。9:5 このような創始者たちによって四頭立ての車が世に出たのですから、御者たちにまで偶像礼拝の色を着せたのも当然です。初めは、色は白と赤の二つだけでした。白は、雪が白いので冬に、赤は、日が赤く照るので夏にささげられていました。9:6 しかしその後、快楽も迷信も進んで、ある者は赤をマルスに、ある者は白をゼピュロスたち（西風）にささげました。緑は母なる大地に、あるいは春に、青は天と海に、あるいは秋にささげられました。9:7 偶像礼拝は、どんな種類のものも、神によって罪に定められています。ですから、世の元素にささげて汚す偶像礼拝も、もちろん罪に定められるのです。

10:1 舞台のものに移りましょう。その起源が戦車競走と共通で、名も同じであることは、すでに示しました。遊戯という呼び名が初めから共通で、その運営も馬の技と結びついているからです。10:2 装いも、次の点で共にしています。神殿と祭壇から、香と血のあの不幸を伴い、笛とラッパの鳴る中を、舞台へと進んで行くのです。それを取り仕切るのは、葬いと儀式の、もっとも汚れた二人の差配役、葬儀の進行役と腸卜師です。10:3 このように、遊戯の起源から戦車競走に移ってきたので、ここからは劇場の遊戯に話を向けます。場所から始めましょう。劇場は、もともと、まさしくウェヌスの聖所なのです。この種の建物が世に生き延びたのは、結局のところ、このやり方によってでした。10:4 監察官たちは、建ちかけたばかりの劇場を、たびたび取り壊していました。風俗を案じたからです。放埒から風俗に大きな危険が及ぶことを、前もって見ていたのです。こうして、すでにここから、彼ら自身の判断がわたしたちと同じ側に立ち、異教徒に対する証しとなります。また、わたしたちにとっては、人間の規律さえ先に同じ判断を下していたことが、わたしたちの言い分を強める助けになるのです。10:5 そこで、大ポンペイウスのことです。自分の劇場のほかには何ものにも劣らない偉い人でした。彼は、あのあらゆる恥ずべきことの砦を建てたとき、いつか後の世の自分の評判に監察官の咎めが及ぶことを恐れました。それで、劇場の上にウェヌスの神殿を載せたのです。そして、奉献式に布告で民衆を呼び集めたとき、それを劇場とは呼ばず、ウェヌスの神殿と呼びました。「その下に、わたしたちは見世物の座席を置いた」と言ったのです。10:6 こうして彼は、罪に定められ、また定められるべき建物を、神殿の名で覆い隠しました。迷信によって、規律を欺いたのです。しかし、ウェヌスとリベルは気が合います。酩酊と情欲のこの二つのダイモンは、互いに示し合わせ、結託しているのです。10:7 ですから、ウェヌスの劇場は、リベルの家でもあります。ほかの劇場の遊戯も、本来はリベラリア祭と呼ばれていました。リベルにささげられていたからです（ギリシア人のもとのディオニュシア祭がそれです）。それだけでなく、リベルが設けたものでもあったからです。10:8 舞台の技にも、明らかにリベルとウェヌスの後ろ盾が

あります。舞台に固有のものは、身ぶりと体のなよなよした動きで、柔弱さをウェヌスとリベルにいけにえとしてささげます。一方は性によって、もう一方はなよなよしたさまによって、しまりのない神々です。他方、声と節と楽器と竪琴で行われるものは、アポロたち、ムーサたち、ミネルウァたち、メルクリウスたちを持ち主としています。10:9 キリスト者よ、創始者を憎まずにはいられないものを、憎みなさい。ここで、技について、また、創始者の名をわたしたちが忌み嫌うものについて、述べておきたいと思います。死者の名は何ものでもないことを、わたしたちは知っています。その像も同じです。しかし、そうした名のもとに像が立てられると、そこで働き、喜び、神であると偽る者がいます。それがだれかを、わたしたちは知らないわけではありません。それは悪しき霊たち、すなわちダイモンです。10:10 ですから、わたしたちには分かります。技も、その創始者の名に住みついている者たちの誉れにささげられているのです。技を設けた者がそのために神々とされているのですから、その技が偶像礼拝と無縁であるはずはありません。いや、技については、もっと根本から、前もって、次のことを言っておくべきでした。ダイモンは初めから、偶像礼拝のほかの汚れに加えて、見世物の汚れも自分たちのために用意していました。それによって人を主から引き離し、自分たちの誉れに縛りつけるためです。そして、こうした技の才能をも、人に吹き込んだのです。10:11 自分たちのもとに届くはずのものを、ほかの者たちが手配するはずはなかったからです。また、そのころ、ほかの人間を通して技を世に出すはずもありませんでした。ダイモンは、まさにその者たちを通したのです。その名と像と物語に、神に祭り上げるという欺きを据え、それが自分たちのもうけになるようにした者たちです。

11:1 順序どおり最後まで述べるために、競技も取り上げて調べましょう。競技の起源は、遊戯に近いところにあります。ですから、競技も聖なるものか葬いのものとして設けられ、諸民族の神々のためか、死者のために行われるのです。11:2 名もそれに従っています。オリュンピアの競技はユピテルにささげられ、ローマではカピトリウムの競技がそれに当たります。同じく、ネメアの競技はヘルクレスに、イストミアの競技はネプトゥヌスにささげられています。ほかの競技は死者のためのものです。そうであれば、競技の装いまで偶像礼拝が汚しているとしても、何の不思議があるでしょうか。汚すのは、異教の冠、祭司である主宰者たち、組合の下役たち、そして最後には牛の血そのものです。11:3 場所についても補っておきます。これも、戦車競走場や劇場に劣らず共通の場所です。ムーサたちの技、ミネルウァの技、アポロの技の組合のための場所です。さらに、マルスの技の組合のための場所でもあります。人々は競技場で、競い合いとラッパによって、戦車競走場をまねます[1]。その競技場もまた、そこで祭りが行われる偶像の、神殿そのものなのです。体育の技も、カストルの兄弟、ヘルクレスたち、メルクリウスたちの教えが伝えたものです。

12:1 残るのは、あのもっとも名高く、もっとも好まれている見世物を調べることです。剣闘士の試合（ムヌス）は、務め（オフィキウム）から名づけられました。務めは、ムヌスとも呼ばれるからです。昔の人々は、この見世物によって、死者への務めを果たしていると考えていました。それを、もっと人間らしい残酷さでやわらげてからのことです。12:2 昔は、死者の魂を人の血でなだめるものと信じられていました。そこで、捕虜や、性の悪い奴隷を買ってきて、葬儀でいけにえにしていたのです。その後、この不敬虔を、快楽で覆い隠すことにしました。そこで、用意した者たちに、そのころできるかぎりの武器と仕方で訓練を施しました。ただ、殺されることを学ばせるためです。そしてやがて、死者に供え物をする日を布告し、その日に墓のそばで彼らを差し出したのです。12:3 こうして、死を人殺しで慰めていたのです。これが剣闘士の試合の起源です。しかし、人々は次第に進み、残酷さが増すのと同じだけ、それを好むようにもなりました。獣のような見物人の快楽は、人の体が獣にも引き裂かれなければ、満たされなかったからです。12:4 ですから、死者のためになだめの供え物とされたものは、もちろん死者を祭ることに数えられました。この種のものは、やはり偶像礼拝です。偶像礼拝もまた、死者を祭ることの一種だからです。どちらも、死者に仕えるのです。そして、死者の偶像には、ダイモンが宿っています。12:5 名についても考えてみましょう。この種の催しは、死者への誉れから、生きている者の誉れ、すなわち官職に移りました。財務官や政務官の職、フラメンの職や祭司職のことです。それでも、その位の名は、偶像礼拝の罪にとらわれています。ですから、位の名のもとに行われるものはみな、その位の汚れにもあずかるほかあり

ません。そこから事の起こりを得ているからです。12:6 装いについても、同じように解しましょう。官職そのものの飾りに数えられる装いのことです。紫の衣も、権標も、髪帯も、冠もそうです。さらに、集会での告知や布告も、前日の祭りの粥もそうです。どれも、悪魔の行列なしには、ダイモンを招くことなしには、成り立たないのです。12:7 では、あの恐ろしい場所については、何を語ればよいでしょうか。偽りの誓いをする者さえ耐えられない場所です。闘技場は、あらゆるダイモンの神殿であるカピトリウムよりも、多くの、しかも荒々しい名にささげられているのです。そこには、収める人の数だけ、汚れた霊が座を占めています。12:8 技についても締めくくると、両方の遊戯（剣闘と獣狩り）の守り神がマルスとディアナであることを、わたしたちは知っています。

13:1 見世物がどれほど多くの、どんな仕方で偶像礼拝を犯しているかについて、順を追って十分に述べ尽くした、とわたしは思います。起源、名、装い、場所、技についてです。それは、偶像を二度[2]捨てたわたしたちに、それらがどの点から見てもふさわしくないことを、確かめるためでした。使徒が言うとおり、偶像が何かほんとうにあるものだからではありません。人々が供える物は、ダイモンに供えるのだからです（第一コリント八・四、一〇・一九〜二〇）。ダイモンは、偶像の奉献のうちに宿っています。死者の偶像であれ、彼らが神々と思うものの偶像であれ、そうなのです。13:2 ですから、偶像の二つの種類は、同じ一つのありさまのものです。死者と神々は一つのものだからです。そのため、わたしたちは、どちらの偶像礼拝も控えます。神殿も墓も、同じように唾棄します。どちらの祭壇も知らず、どちらの像も拝みません。供え物をささげず、死者を祭りません。供え物にされたものも、死者を祭るのに使われたものも、食べません。わたしたちは、神の食事とダイモンの食事とを、同時に食べることはできないからです（第一コリント一〇・二一）。13:3 わたしたちは、のどと腹をさえ、汚れから守っています。そうであれば、なおさら、もっと尊いもの、すなわち目と耳を守って、偶像への供え物と死者への供え物である快楽を控えます。この快楽は、はらわたを通るのではなく、霊と魂そのものの中で消化されます。そして、霊と魂の清さのほうが、はらわたの清さよりも、神にとって大切なのです。

訳注

1 この文は写本の本文が乱れていて、意味の取り方が定まらない。

2 『二度』は写本になく、後に補われた語。

見世物について　14〜19章　欲と快楽、戦車競走場、劇場、競技場、闘技場

14:1 さて、偶像礼拝という名については、ひととおり述べ終えました。この名だけでも、見世物を断つ理由として十分なはずです。しかし、ここからは別の理由で、余分に論じましょう。とくに、自分を甘やかす人々のためです。この控えることは名を挙げて定められてはいない、と彼らは言います。世の欲が罪に定められているのに、それでは見世物について宣告が足りないかのようです。14:2 金銭や地位、大食や情欲、名誉への欲があるのと同じように、快楽への欲もあります。そして、見世物も快楽の一つの種類です。思うに、類として名指された欲は、その中に快楽をも含んでいます。同じく、類として解された快楽は、種として、見世物にも振り分けられるのです。

15:1 ところで、場所のありさまについては、前に述べました。場所がそれ自体でわたしたちを汚すのではありません。そこで行われることによって汚すのです。場所は、そうしたことから汚れを吸い込むやいなや、今度はそれをほかの人々に吐きかけます。15:2 ですから、前に述べたとおり、偶像礼拝という主な項目は、それでよいとしましょう。ほかに、見世物そのものの性質を、神に背くものとしてすべて挙げましょう。神は、聖霊を穏やかさと柔和と静けさと平和によって扱い、熱狂やいら立ちや怒りや悲しみで乱さないよう命じられました（エペソ四・三〇〜三一）。聖霊は、その本性のよさのために、優しく繊細だからです。15:3 その聖霊が、どうして見世物と折り合えるでしょうか。どんな見世物も、霊を揺さぶらずにはいないからです。快楽のあるところには、肩入れもあります。快楽は、肩入れによって味わいを得るのです。肩入れのあるところには、張り合いもあります。肩入れは、張り合いによって味わいを得るのです。15:4 さらに、張り合いのあるところには、熱狂も、いら立ちも、怒りも、悲しみもあります。そのほか、そこから出るものもあります。それらは、こうしたものと同じく、教えにふさわしくありません。ある人が、地位や年齢や生まれつきに応じて、慎み深く、礼儀正しく見世物を楽しむとしましょう。それでも、その人の精神は動かずにはいられません。霊がひそかに揺らがずにはいないのです。15:5 だれも、心を動かされずに快楽へ来ることはありません。だれも、心の動きを、それに伴う出来事なしに味わうことはありません。出来事そのものが、心の動きをかき立てるのです。もし心の動きがやめば、快楽もありません。そうなれば、その人は、何も得られないところに集まるのですから、もうむなしさの罪を負っています。15:6 しかし、むなしさも、わたしたちには無縁のものだと思います。それに、その人は、自分が同じになりたくない人々の中に身を置きます。自分はその人々を忌み嫌う者だと、はっきり認めているのにです。それでは、自分で自分を罪に定めているのではありませんか。わたしたちにとっては、自分でそうしたことを何もしないだけでは足りません。そうしたことを好んでする人々と、交わらないことも必要です。15:7『あなたは盗びとを見れば、これと共に走った』と言われています（詩篇五〇・一八）。世においてさえ、その人々と共にとどまらずにすめば、よいのですが。しかし、せめて世の事柄では、わたしたちは離れています。世は神のものですが、世の事柄は悪魔のものだからです。

16:1 このように、熱狂はわたしたちに禁じられています。ですから、わたしたちは、すべての見世物から引き離されます。戦車競走場からもです。そこでは、まさに熱狂がつかさどっています。見なさい。民衆は、もう熱狂して見世物へやって来ます。もう騒ぎ立て、もう目が見えなくなり、もう賭けで興奮しているのです。16:2 彼らには、法務官が遅すぎます。目はいつも、法務官の壺の中で、くじと一緒にころがっています。それから、合図を待って、はらはらしながら身を乗り出します。一つの狂気が、一つの声になるのです。その狂気を、むなしさから見て取りなさい。16:3「投げた」と言い、だれもが一度に見たものを、互いに知らせ合います。わたしは、彼らの目が見えない証拠を握っています。投げられたものが何なのか、彼らには見えていないのです。彼らは白い布だと思っています。しかし、それは、高みから投げ落とされた悪魔の姿なのです。16:4 ですか

ら、そこから、狂乱と激情と争いへと進みます。平和の祭司たちには許されないことは、なんでもそうです。そこから、ののしりや、憎むだけの正しい理由もない悪口が出ます。また、愛するだけの値打ちもない声援も出ます。16:5 そこで騒ぐ人々は、自分の主人ではありません。その人々が、何を自分のものとして得るというのでしょうか。得るとすれば、ただ一つ、自分の主人でなくなる、そのことだけです。彼らは、人の不幸を悲しみ、人の幸せを喜びます。16:6 彼らが望むものも、忌み嫌うものも、彼らとは関わりのないことです。こうして、彼らの愛はいわれがなく、憎しみは不当です。それとも、理由なく愛するほうが、理由なく憎むより許されるのでしょうか。16:7 神は、理由があっても、憎むことを禁じておられます。敵を愛するよう命じられるのです（マタイ五・四四）。神は、理由があっても、ののしることを許されません。ののしる者を祝福するよう命じられるのです（ルカ六・二八）。しかし、戦車競走場ほどとげとげしいところがあるでしょうか。そこでは、皇帝たちでさえ、自分たちの同胞の市民でさえ、容赦されないのです。16:8 戦車競走場を狂わせているこうしたことのどれかが、どこかで聖徒にふさわしいなら、戦車競走場でも許されるでしょう。しかし、どこでもふさわしくないなら、戦車競走場でも許されません。

17:1 同じように、わたしたちは、あらゆる恥知らずなことを遠ざけるよう命じられているのではありませんか。ですから、わたしたちは劇場からも離れます。劇場は、恥知らずなことの専用の集会所です。よそで認められないことのほかは、何も認められない場所なのです。17:2 こうして、劇場の神に最も気に入られるものは、たいてい汚らわしさで組み立てられています。アテラナ劇の役者は、それを身ぶりで演じます。笑劇の役者は、女の衣装まで着て、それを演じてみせます。性の恥じらいを追い払うので、舞台でより家でのほうが、たやすく顔を赤らめるほどです。さらに、無言劇の役者は、その芸を身につけるために、子供のころからそれを体に受けるのです。17:3 公の情欲のいけにえである遊女たちまで、舞台に引き出されます。女たちの前に出されるので、なおさらみじめです。女たちにだけは隠れていたのですから。そして、あらゆる年齢、あらゆる身分の人の目の前を引き回されます。その居場所も、値段も、評判も、知る必要のない人々にまで触れ回られます。ほかのことは言いません。闇や自分の洞穴に隠れて、昼を汚さないでいるのがふさわしいことまで触れ回られるのです。17:4 元老院は顔を赤らめるがよい。すべての身分は顔を赤らめるがよい。自分の恥じらいを殺したあの女たちでさえ、明るみと民衆の前での自分の身ぶりにおびえて、年に一度は顔を赤らめるのです。わたしたちは、あらゆる恥知らずなことを忌み嫌うべきです。そうであれば、口にしてはならないことを、どうして聞いてよいでしょうか。下品な冗談も、すべての無益な言葉も、神に罪に定められていることを、わたしたちは知っているのです（エペソ五・四、マタイ一二・三六）。17:5 同じく、行うのが恥ずべきことを、どうして見てよいでしょうか。口から出るものは人を汚します（マタイ一五・一一）。それなのに、同じものが目と耳から入ると人を汚さない、と思えるでしょうか。耳と目は、霊に仕える者です。仕える者が汚れていては、主人を清く保つことはできません。17:6 こうして、恥知らずなことが禁じられていることから、劇場が禁じられていることも分かります。わたしたちは、世の文学の教えも、神の前で愚かなものとされているので、退けます（第一コリント三・一九）。そうであれば、ある種類の見世物についても、わたしたちには十分に定めが示されています。世の文学によって、遊びの舞台と競いの舞台とを分ける種類のことです。17:7 悲劇と喜劇は、罪と情欲を生み出すものです。悲劇は血なまぐさく不敬で、喜劇は淫らで放埒です。そうであれば、むごいことであれ卑しいことであれ、語り出すことが、行うことよりましなはずはありません。行いで退けられることは、言葉でも受け入れてはならないのです。

18:1 もしあなたが、競技場は聖書に名が出てくる、と言い張るなら、たしかにそのとおりです（第一コリント九・二四）。しかし、競技場で行われることが、あなたの目にふさわしくないことは、あなたも否定しないでしょう。拳と蹴りと平手打ち、手のあらゆる乱暴、人の顔、すなわち神のかたちを、どんなふうにでも打ちのめすことです。18:2 むなしい競走も、投げ槍も、もっとむなしい跳躍も、あなたはどこでも認めないでしょう。人を傷つける力もむなしい力も、どこでもあなたを喜ばせはしないでしょう。作り物の体の手入れも同じです。それは神の造形を越えようとするものです。ギリシアのひまのために肥え太らされた人々を、あなたは憎むでしょう。18:3 格闘術もまた、悪魔の仕事です。最初の人間たちを投げ倒したのは悪魔でした。その身ぶりそのものが、蛇の力です。つか

まえるのにしつこく、締めつけるのにくねくねし、すり抜けるのにぬるぬるしています。あなたには、冠を使う用はありません。それなのに、どうして冠から快楽をあさるのですか。

19:1 さて、闘技場を退けよという言葉も、聖書に出てくるのを、わたしたちは待つことにしましょう。残酷さも、不敬も、獣のような荒々しさも、わたしたちに許されていると言い張れるなら、闘技場へ行きましょう。わたしたちが言われているとおりの者なら、人の血を楽しみましょう。19:2 罪ある者が罰せられるのはよいことです。罪ある者でなければ、だれがそれを否定するでしょうか。それでも、罪のない人は、ほかの人の刑罰を喜ぶことができません。罪のない人には、むしろ悲しむほうがふさわしいのです。自分と同じ人間が、あれほど残酷に処されるほどの罪ある者になったからです。19:3 それに、獣のところへであれ、ほかのどんな刑罰へであれ、言い渡されるのはいつも罪ある者でしょうか。だれがそれをわたしに請け合うでしょうか。罪のない者にも、それが下されることはないのでしょうか。裁く者の報復によって、弁護の弱さによって、拷問による取り調べの厳しさによってです。19:4 ですから、悪い者が罰せられるときに、それを知らないほうが、どれほどよいでしょう。そうすれば、よい者が滅びるときも知らずにすみます。もっとも、彼らが善を味わい知っているならの話です。少なくとも、罪のない剣闘士たちが、剣闘士の養成所に身を売っていることは確かです。公の快楽のいけにえとなるためです。19:5 また、養成所送りの刑を受けた者たちもいます。なんということでしょうか。軽い罪から、刑罰によって、人殺しへと進歩するのです。しかし、これは異教徒に答えたことです。キリスト者が、この見世物を避けることを、これ以上長く学ぶ必要などありません。19:6 もっとも、これらのことをみな、もっと十分に言い表せる者はいません。今もなお見物している者でなければです。わたしは、言い尽くさないほうがよいのです。思い出すよりは。

見世物について　20〜25章　異教徒の食い違い、演じる者たちへの汚名、洗礼の誓い

20:1 ですから、あの人々の論は、なんとむなしく、いや、なんと望みのないものでしょうか。彼らは、疑いなく、快楽を失うまいとする言い逃れから、こう言い張ります。聖書には、この控えることについて、特に名指しての言及も、箇所を挙げての言及もない。神のしもべがそうした集まりに加わるのを、はっきり禁じる言及はない、というのです。20:2 最近、遊戯の楽しみの好きなある人から、新しい弁明を聞きました。「太陽は、いや神自身さえ、天から見ている。それでも汚れはしない」と、その人は言います。たしかに、太陽は下水にさえ光を注ぎますが、汚れはしません。20:3 しかし、神が人の悪行を何一つ見ないでおられたら、よかったのです。そうすれば、わたしたちはみな裁きを逃れられたでしょう。ところが、神は強盗も見ておられます。偽りも、姦淫も、詐欺も、偶像礼拝も、見世物そのものも見ておられます。だからこそ、わたしたちは見ないのです。すべてを見ておられるかたに、見られないためです。20:4 人よ、あなたは、罪ある者と裁き手とを一緒にしています。罪ある者は、見られるから罪ある者なのです。裁き手は、見るから裁き手なのです。それでは、わたしたちは、戦車競走場の境の外でも熱狂にふけり、劇場の扉の外でも恥知らずなことに心を向けるのでしょうか。競技場の外でも思い上がり、闘技場の外でも無慈悲になるのでしょうか。神が、円天井の通路や階段席や日よけ幕の外にも、目を持っておられるからというのでしょうか。20:5 そう考えるなら、わたしたちは思い違いをしています。神が罪に定められることは、どこでも、いつでも、弁解の余地がありません。いつでもどこでも許されないことは、どこでも、いつでも許されないのです。これが、真理の全き姿です。また、真理にふさわしい教えの完全さ、変わらない恐れ、誠実な従順です。考えを変えず、判断を揺るがせないことです。20:6 本当に善であるもの、本当に悪であるものが、別のものになることはありえません。すべては、神の真理のもとに定まっているのです。

21:1 異教徒には、真理の完全さがありません。神が、彼らに真理を教えるかたではないからです。彼らは、悪も善も、自分の気ままと欲にまかせて解釈します。ある所で善であるものが、別の所では悪になり、ある所で悪であるものが、別の所では善になるのです。21:2 こうして、次のようなことが起こります。人前では、膀胱の差し迫った必要があっても、上着をほとんど上げない人がいます。その同じ人が、戦車競走場では、恥ずかしいところをすっかり皆の顔に向けて用を足すのです。未婚の娘の耳を、汚らわしい言葉から一つ残らず守る人がいます。その人が、自分で娘を劇場へ連れて行き、あのような声と身ぶりの中に置くのです。通りで殴り合いのけんかを見れば、止めるか、忌み嫌う人がいます。その同じ人が、競技場では、もっとひどい拳の打ち合いに声援を送ります。世の定めのとおりに死んだ人の亡きがらにさえ、身震いする人がいます。その同じ人が、闘技場では、かみ砕かれ、引き裂かれ、自分の血にまみれた体を、上から、少しも動じない目で眺め下ろすのです。いや、人殺しが罰せられるのを見て是とするために、見世物に来る人がいます。その同じ人が、いやがる剣闘士を、鞭と棒で人殺しへと駆り立てます。目立った人殺しには、だれにでも獅子をけしかけよと求める人がいます。その同じ人が、残忍な剣闘士には、解放の印として木剣を求め、帽子を褒美に与えるのです。獅子に痛めつけられたほうの人殺しは、顔まで眺めようと、もう一度呼び出させます。遠くから殺させたいと思った者を、近くで、いっそう喜んで見分けるのです。殺させたかったのではなく、痛めつけさせたかっただけなら、なおさら冷酷です。

22:1 なんの不思議があるでしょうか。こうしたちぐはぐは、人間のすることです。彼らは、感覚の移ろいやすさと判断の気まぐれによって、善と悪のありさまを混ぜ合わせ、取り替えるのです。実際、見世物の主催者や管理者たち自身が、あの、ひどく愛されている者たちをおとしめています。戦車の御者、舞台の役者、運動選手、闘技場の者たちです。男たちは彼らに魂を、女たちは体までもさ

さげます。その者たちのために、人々は、自分が非難していることを犯すのです。主催者たちは、彼らをほめあげるのと同じ点で、彼らを引き下げ、格を落とします。いや、汚名と身分の格下げによって、はっきり罰するのです。元老院の議場からも、演壇からも、元老院からも、騎士の身分からも締め出します。そのほかのあらゆる栄誉からも、ある種の飾りからも締め出すのです。22:2なんというゆがみでしょう。彼らは、罰する相手を愛し、認める相手をさげすみます。技はほめあげ、技を行う者には汚名を着せるのです。名を上げるそのことのために、だれかが汚名を着せられるとは、なんという判断でしょうか。いや、それが悪い事柄だという、なんという告白でしょう。それを行う者たちは、ひどく気に入られているのに、汚名を免れないのですから。

23:1このように、人間の分別でさえ、快楽をひいきする心が騒いで邪魔をしても、彼らを罰すべきだと判断します。地位の益を取り上げ、悪名という岩場へ追いやるのです。そうであれば、神の正義は、こうした技を行う者を、どれほど厳しく罰せられるでしょうか。23:2あの御者が、神に喜ばれるでしょうか。あれほど多くの魂を騒がせ、あれほど多くの狂乱と、あれほど多くの心の揺れに仕える者です。冠をかぶって祭司のよう、色とりどりの衣で取り持ち屋のようです。悪魔が、エリヤに張り合って、車で連れ去ろうと飾り立てた者なのです（列王紀下二・一一）。23:3かみそりで顔つきを変える者も、神に喜ばれるでしょうか。その者は、自分の顔に対して不実です。顔をサトゥルヌスやイシスやリベルに似せるだけでは足りず、そのうえ平手打ちの辱めに差し出すのです。まるで主の掟をもてあそぶかのようにです。23:4悪魔もまた、もちろん、打たれる頬を忍耐して差し出せと教えるわけです（マタイ五・三九）。同じように、悪魔は悲劇役者たちを、厚底の靴で背高くしました。だれも自分の背丈を少しでも伸ばすことはできない、とあるからです（マタイ六・二七）。悪魔はキリストをうそつきにしたいのです。23:5さらに、仮面を作る仕事そのものが、神に喜ばれるかどうか、わたしは問います。神は、どんな形も造ることを禁じておられます（出エジプト二〇・四）。まして、ご自分のかたちの似姿ならなおさらです。真理の創始者は、偽りを愛されません。神のもとでは、作り物はすべてまがいものです。23:6ですから、声や性や年齢を偽り、愛も怒りも嘆きも涙も本物らしく見せる者がいます。あらゆる偽善を罪に定めるかたは、その者をお認めにならないでしょう。それに、神は律法で、女の衣装を着る者はのろわれると定めておられます（申命記二二・五）。そうであれば、女を演じるために仕込まれる無言劇の役者を、どう裁かれるでしょうか。23:7拳闘の名手も、罰を受けずにすむのでしょうか。革ひもの傷あとも、拳のたこも、耳のこぶも、その者は造られたときに神から受けた、とでもいうのでしょう。神が彼に目を預けられたのも、殴られてつぶれるためだった、というのでしょう。23:8人を自分の前に、獅子への盾として差し出す者のことは、言わずにおきます。その者は、のちに同じ人の喉をかき切ります。人殺しとして物足りなくならないように、というわけです。

24:1見世物に当てられたもののどれ一つ、神に喜ばれはしません。主に喜ばれないものが、神のしもべたちにふさわしいはずもありません。このことを、わたしたちは、あとどれだけの仕方で説き尽くせばよいのでしょうか。わたしたちは、すべてが悪魔のために設けられ、悪魔のものでしつらえられていることを示しました。神のものでないもの、神に喜ばれないものは、すべて悪魔のものだからです。そうであれば、これこそ悪魔の行列です。わたしたちは、信仰の印を受けたときに、それを捨てると誓ったのです。24:2捨てると誓ったものには、行いでも、言葉でも、見ることでも、眺めることでも、関わってはなりません。そうでなければ、印の証しを破ることで、わたしたちは印そのものを捨て去り、破ることにならないでしょうか。それでは、異教徒たち自身に答えを求めるほかないのでしょうか。24:3キリスト者が見世物を楽しんでよいかどうか、彼ら自身がわたしたちに告げるがよい。ところが彼らは、見世物を退けることで、人がキリスト者になったことを何よりも見分けるのです。ですから、自分がそれと見分けられるしるしを取り除く人は、自分がキリスト者であることを、はっきり否んでいるのです。24:4そのような人に、なんの望みが残っているでしょうか。だれも、自分の武器を投げ捨てずに、敵の陣営に移りはしません。自分の主君の軍旗と、主君への誓いを捨てず、ともに滅びることを取り決めずに、移りはしないのです。

25:1そのような人が、そのとき、神のことを思い返すでしょうか。神にかかわるものが何もないところに、身を置いているのにです。御者のために争いなが

ら、心に平和を保つ、とでもいうのでしょうか。激情に我を忘れながら[1]、貞潔を学ぶ、とでもいうのでしょうか。25:2 いや、どの見世物でも、女たちと男たちのことさら念入りな身なりほど、つまずきとなるものはありません。気が合うことも、声援で示し合わせることも、逆に対立することも、ふれあいによって、情欲の火花をあおり立てるのです。25:3 つまり、見世物に入るとき、だれもが、見られることと見ることのほかには何も考えません。それなのに、悲劇役者がわめいているあいだに、その人は、どこかの預言者の叫びを思い返すでしょうか。女々しい役者の節回しのあいだに、ひとりで詩篇を思い起こすでしょうか。25:4 運動選手たちが戦っているあいだに、その人は、打ち返してはならない、と言うつもりでしょうか（マタイ五・三九）。熊の噛みつきや網闘士の胸当てに目を釘づけにしながら、あわれみに心を動かされることができるでしょうか。神が、ご自分の者たちから、これほど破滅をもたらす快楽への欲を遠ざけてくださいますように。25:5 神の教会から悪魔の教会へ向かうとは、なんということでしょうか。ことわざに言う、天から泥の中へ、です。あなたが神に向かって差し上げた手を、あとで役者をほめて拍手するのに疲れさせるとは、なんということでしょうか。25:6 聖なるものに向かってアーメンと言ったその口で、剣闘士をほめたたえるとは、なんということでしょうか。神とキリストのほかのだれかに、「アプ・アイオーノス」、すなわち「永遠の昔から」と言うとは。

訳注

1 古い写本では『笑劇の役者に見とれながら』となる。

見世物について　26〜30章　ダイモンに取りつかれた女、異教徒の集まり、キリスト者の見世物

26:1 それなら、そういう人々が、ダイモンにさえ入り込まれるようになって、なぜいけないでしょうか。実際、主が証人ですが、劇場に行き、そこからダイモンを連れて帰ってきた女の例があります。それで、霊を追い出すときに、汚れた霊は、大胆にも信者に襲いかかったことを責め立てられました。すると霊は、臆せずに言いました。「しかも、まったく正しいことをしたのだ。おれの持ち場で、この女を見つけたのだから」 26:2 また、確かなことですが、別の女には、悲劇役者の声を聞いたその日の夜、夢の中で、亡きがらを包む亜麻布が示されました。その悲劇役者の名を挙げて、とがめられたのです。そして、その女は、五日を越えて世にとどまりませんでした。 26:3 見世物で悪魔と交わって、主から離れ落ちた人々については、ほかにも、どれほど多くの教訓が出てきたことでしょう。『だれも、ふたりの主人に兼ね仕えることはできない』からです（マタイ六・二四）。光とやみとに、なんの関わりがあるでしょうか（第二コリント六・一四）。いのちと死とに、なんの関わりがあるでしょうか。

27:1 わたしたちは、異教徒のああした集まりや会合を憎まなければなりません。ほかに理由がなくても、次のことだけで十分です。そこでは神の名が冒瀆されます。そこでは、毎日のように、わたしたちを獅子にと叫び求めます。そこから迫害が決められ、そこから試みが送り出されるのです。 27:2 悪しき者たちの声援の渦巻く、あの場所で見つかったら、あなたはどうするのでしょうか。そこで人から何かをされるかもしれない、というのではありません（だれもあなたをキリスト者とは知りません）。そうではなく、天であなたについて何が起こるかを、よく考えなさい。 27:3 悪魔が自分の教会で荒れ狂う、まさにその時に、天使たちがみな天から見下ろしていることを、あなたは疑うのですか。天使たちは一人ひとりを書き留めています。だれが冒瀆を口にしたか、だれがそれを聞いたか、だれが神に逆らって悪魔に舌を貸し、だれが耳を貸したかを。 27:4 それなら、キリストの敵たちの座席から、あの『疫病のような者の座』から（詩篇一・一）、逃げないのですか。その上にのしかかり、邪悪な声に汚された空気そのものからも、逃げないのですか。そこにあるものが、甘く、心地よく、無邪気で、中には立派なものさえあるとしても、かまいません。 27:5 だれも、毒を胆汁やヘレボルスで調合しはしません。味をととのえ、よく風味をつけた、何より甘い料理に、その害毒を入れるのです。悪魔も同じです。自分の作る死の毒を、神のものの中でも、最も喜ばれ、最も歓迎されるものにしみ込ませるのです。 27:6 勇ましいもの、立派なもの、響きのよいもの、調べの美しいもの、巧みなもの。そこにあるものはすべて、毒を入れた菓子からしたたる蜜のしずくと思いなさい。快楽を味わいたい欲を、甘さに潜む危険ほどに重んじてはなりません。

28:1 悪魔の客たちは、そのような甘いもので肥え太るがよい。場所も、時も、招く者も、彼らのものです。わたしたちの宴、わたしたちの婚宴は、まだ来ていません。わたしたちは、彼らと一緒に食卓につくことはできません。彼らも、わたしたちと一緒にはつかないのですから。 28:2 物事は、代わる代わるに定められています。今は彼らが楽しみ、わたしたちが苦しみます。世は喜ぶが、あなたがたは憂えるだろう、と主は言われます（ヨハネ一六・二〇）。ですから、異教徒が喜んでいるあいだは、悲しみましょう。彼らが悲しみはじめたとき、わたしたちが喜ぶためです。今一緒に喜んで、そのときにも一緒に悲しむことのないようにしましょう。 28:3 キリスト者よ、世にあっても快楽を欲しがるなら、あなたは贅沢です。いや、こんなものを快楽と思うなら、ひどく愚かです。哲学者たちは、たしかに、快楽という名を、静けさと心の平安に与えました。それを喜び、それでくつろぎ、それを誇りさえするのです。 28:4 それなのに、あなたときたら、折り返しの柱や舞台や、砂ぼこりや闘技場の砂に恋いこがれるのです。どうか言ってみてください。「わたしたちは快楽なしには生きられない」と。快楽をもって死ぬはずのわたしたちがです。わたしたちの願いは、使徒の願いと同じ

く、世を去って主のもとに迎えられることです（ピリピ一・二三）。ほかに何があるでしょうか。願いのあるところに、快楽もあるのです。

29:1 それでも、この一生を楽しみで過ごさなければならないと思うなら、なぜ、そんなに恩知らずなのですか。神があなたに分け与えてくださった、これほど多くの、これほどの快楽に満足せず、それと認めもしないのですから。29:2 父なる神、主との和解にまさって、何が楽しいでしょうか。真理の啓示、誤りに気づくこと、以前のこれほどの罪のゆるしにまさって、何が楽しいでしょうか。快楽そのものをいとうこと、世全体をさげすむことにまさる、どんな大きな快楽があるでしょうか。本当の自由、損なわれていない良心、足りている生活、死を少しも恐れないことにまさる快楽があるでしょうか。29:3 あなたが諸国民の神々を踏みつけ、ダイモンを追い出すこと。病をいやし、啓示を求め、神に生きること。これにまさる快楽があるでしょうか。これがキリスト者の快楽、キリスト者の見世物です。聖く、永遠で、ただで見られます。これらの中に、戦車競走を読み取りなさい。世の走りを見つめなさい。過ぎ去る時を、周回として数えなさい。終わりの折り返しの柱を待ち望みなさい。諸教会の交わりを守りなさい。神の合図に身を起こし、天使のラッパに立ち上がりなさい（第一テサロニケ四・一六）。殉教のしゅろの枝を誇りとしなさい。29:4 舞台の学芸が楽しいなら、わたしたちには書物が十分にあります。詩句も十分にあり、格言も十分にあり、歌も声も十分にあります。それも、作り話ではなく真実で、仕掛けではなく素朴さです。29:5 拳闘や格闘も見たいのですか。小さくもなく、数も多いものが、すぐそこにあります。見なさい。恥知らずなことが純潔に倒され、不実が信仰に打ち殺されています。残酷さがあわれみに打ち砕かれ、ずうずうしさが慎みに覆い隠されています。わたしたちのもとには、このような競技があり、その中で、わたしたち自身が冠を受けるのです。そのうえ、血も少しは見たいのですか。キリストの血があります。

30:1 しかし、間近に迫っている見世物は、どれほどのものでしょう。主の来臨です。主は今や疑われることなく、今や威光に満ち、今や凱旋しておられます。天使たちの、あの歓喜はどれほどでしょう。よみがえる聖徒たちの栄光はどれほどでしょう。それに続く、正しい者たちの御国はどれほどでしょう。30:2 新しいエルサレムの都は、どれほどでしょう（黙示録二一・二）。しかし、ほかにもまだ見世物が残っています。あの最後の、永遠の裁きの日です。諸国民が予期しなかった日、あざけった日です。そのとき、世のこれほどの古さも、そこに生まれ出たこれほど多くのものも、一つの火に飲み込まれるのです（第二ペテロ三・一〇）。30:3 そのときの見世物の、なんという広がりでしょう。何に驚嘆しましょうか。何を笑いましょうか。どこで喜び、どこで躍り上がりましょうか。天に迎えられたと告げられていた、これほど多くの、これほど偉大な皇帝たちを見るのです。彼らは、ユピテルそのものとも、自分たちの昇天の証人たちとも一緒に、深い闇の底でうめいているのです。30:4 また、主の御名を迫害した長官たちを見るのです。彼らはかつて、キリスト者に躍りかかる炎で荒れ狂いました。今は、その炎よりも、もっと荒々しい炎に溶けているのです。さらに、あの賢い哲学者たちが、一緒に燃える弟子たちの前で、顔を赤らめているのを見るのです。哲学者たちは弟子たちに、何事も神にかかわりがないと説いていました。魂などない、あるいは、魂はもとの体に戻らない、と言い張っていました。30:5 また、詩人たちが震えおののいているのを見るのです。ラダマンテュスやミノスの裁きの座ではなく、思いもかけなかったキリストの裁きの座の前でです。そのときこそ、悲劇役者たちは聞くに値するでしょう。自分自身の災いの中では、いっそうよく声が出るはずですから。そのときこそ、役者たちは、とくと見るに値するでしょう。火に溶けて、いっそうなよなよしているはずですから。そのときこそ、御者は見ものでしょう。炎の車の上で、全身を赤くしているのです。そのときこそ、運動選手たちは眺めがいがあるでしょう。練習場ではなく、火の中に投げ込まれているのです。ただ、そのときでさえ、わたしは彼らを見たいとは思いません。むしろ、主に向かって荒れ狂った者たちにこそ、飽くことのない目を向けたいのです。30:6 わたしは言うでしょう。「これが、あの大工の、あるいは身を売る女の息子だ。安息日を破る者、サマリヤ人、ダイモンに取りつかれた者だ（マタイ一三・五五、ヨハネ五・一八、八・四八）。これが、おまえたちがユダから買い取った者だ。これが、葦の棒と拳で打たれ、つばきで辱められ、胆汁と酢を飲まされた者だ（マタイ二六・六七、二七・三〇、三四）。30:7 これが、弟子たちがひそかに盗み出して、よみがえったと言わせた者だ（マタイ二八・一三）。

あるいは、園の番人が、自分のレタスが行き来する人の多さで荒らされないように、運び去った者だ（ヨハネ二〇・一五）」。このようなものを見て、このようなものに躍り上がること。どんな法務官、執政官、財務官、祭司が、自分の気前のよさで、それをあなたに与えてくれるでしょうか。30:8 とはいえ、わたしたちは、信仰によって、霊が思い描くことで、これらを、ある意味ですでに目の前に持っています。それにしても、『目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかった』ものは、どれほどのものでしょうか（第一コリント二・九）。きっと、戦車競走場よりも、両方の観客席（闘技場と劇場）よりも、どんな競技場よりも喜ばしいものでしょう。

祈りについて　1〜4章　新しい祈りの形、父、御名、みこころ

1:1 神の霊、神の言葉、神の理。理の言葉であり、言葉の理であり、また霊である方。その両方であるわたしたちの主イエス・キリストが、わたしたち新約の弟子に、祈りの新しい形を定められました。1:2 この事柄においても、新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れ、新しい布ぎれは新しい着物に縫いつけなければならなかったのです（マタイ九・一六〜一七）。ともかく、以前にあったものは、どれも次のいずれかになりました。割礼のように変えられたか、律法の残りのように補われたか。あるいは、預言のように成就されたか、信仰そのもののように完成されたかです。1:3 神の新しい恵みは、すべてを肉のものから霊のものへと新しくしました。福音が加えられたからです。福音は、以前の古いものすべてを締めくくるものです。その福音の中で、わたしたちの主イエス・キリストは、神の霊、神の言葉、神の理であると認められました。霊によって力をふるい、言葉によって教え、理によって来られたのです。1:4 こうして、キリストが定められた祈りは、三つのものから成っています。祈りを言い表す言葉と、祈りに大きな力を与える霊とによって、ヨハネも弟子たちに祈ることを教えていました[1]。しかし、ヨハネのことはみな、キリストのための備えでした。やがてキリストご自身が栄えると、先駆けの働きはすべて、霊そのものとともに主に移りました。同じヨハネが、あの方は栄え、自分は衰えなければならない、と前もって告げていたとおりです（ヨハネ三・三〇）。1:5 それで、ヨハネがどんな言葉で祈るよう教えたかは、残っていません。地のものが天のものに道を譲ったからです。ヨハネは言います。『地から出る者は、地のことを語る。天から来る者は、その見たところを語る』（ヨハネ三・三一〜三二）。1:6 主キリストのものに、天のものでないものがあるでしょうか。この祈りの教えも、もちろん天のものです。ですから、祝福された人々よ、主の天の知恵を考えてみましょう。まず、隠れて祈れという命令です（マタイ六・六）。主はこの命令で、人に信仰を求められました。全能の神の目と耳が、屋根の下にも、隠れたところにも届いていると、確信する信仰です。また、信仰の慎みも望まれました。どこででも聞き、見ておられると信じるその方にだけ、自分の礼拝をささげる慎みです。1:7 続く命令にある次の知恵も、同じように、信仰と信仰の慎みに関わります。言葉を隊列のように連ねて主に近づかなければならないと、考えないことです（マタイ六・七〜八）。主は、こちらから求めなくても、ご自分の者たちを顧みてくださると、わたしたちは確信しているのです。1:8 それでも、この短さは（これが知恵の第三の段に当たります）、大いなる、祝された解き明かしの中身に支えられています。言葉が切り詰められているぶん、意味は広がっているのです。この祈りは、神への敬意や人の願いといった、祈りに固有の務めだけを含むのではありません。主の言葉のほとんどすべてと、教えを思い起こさせるもののすべてを含んでいます。まことに、この祈りには、福音全体の要約が収められているのです。

2:1 祈りはまず、神をあかしし、信仰によって得たものを示します。わたしたちが『天にいます父よ』と言うときです。わたしたちは神に祈ると同時に、信仰を言い表してもいるのです。この呼び名は、信仰が得させたものだからです。2:2 彼を信じた人々には、神の子と呼ばれる力を与えた、と書いてあるとおりです（ヨハネ一・一二）。そもそも主は、神がわたしたちの父であると、たびたび告げられました。そればかりか、天におられる方のほかは、地上のだれをも父と呼んではならない、と命じられました（マタイ二三・九）。2:3 ですから、こう祈るとき、わたしたちはこの命令をも果たしているのです。父を認める人々は、さいわいです。イスラエルが責められたのは、このことでした。霊は、天と地を証人に呼んで、わたしは子らを生んだのに、彼らはわたしを認めなかった、と言われたのです（イザヤ一・二〜三）。2:4 また、父と呼ぶことで、わたしたちは神とも呼んでいるのです。この呼び名は、慈しみの名でもあり、権力の名でもあります。また、父のうちに子も呼び求められています。主が『わたしと父とは一つである』と言われたからです（ヨハネ一〇・三〇）。2:5 母なる教会さえ、見落とさ

れてはいません。子と父のうちに、母も見いだされるからです。父の名も子の名も、母によって成り立っています。こうして、わたしたちは一つの呼び方、一つの言葉で、神に、ご自分の者たちとともに誉れを帰します。また、命令を思い起こし、父を忘れた者たちをとがめているのです。

3:1 父なる神の名は、だれにも明かされていませんでした。その名を尋ねたモーセでさえ、別の名を聞いたのです（出エジプト三・一三～一四）。その名は、子においてわたしたちに示されました。今や、子こそが父の新しい名なのです。3:2 主は、『わたしは父の名によってきた』と言われます（ヨハネ五・四三）。また、『父よ、み名があがめられますように』とも言われます（ヨハネ一二・二八）。さらにはっきりと、『わたしは人々に、み名をあらわしました』とも言われます（ヨハネ一七・六）。ですから、わたしたちは、この名が聖とされるようにと願うのです。人が神のためによいことを願ってあげるのが、ふさわしいというのではありません。それではまるで、神のために願いをかけられる別のだれかがいるかのようです。また、わたしたちが願わなければ、神がお困りになるかのようです。3:3 もちろん、神は、あらゆる所、あらゆる時に、すべての人からほめたたえられるのがふさわしい方です。その恵みを、いつも覚えているのが当然だからです。この願いも、ほめたたえる代わりになっています。それにしても、神の名が、それ自身で聖でなく、聖とされていない時など、あるでしょうか。神は、ご自身から、ほかの者たちを聖とされるのです。3:4 神を取り巻く天使たちは、神に向かって、絶えず『聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな』と言っています（イザヤ六・三、黙示録四・八）。ですから、わたしたちも同じように、ふさわしい者とされるなら、天使たちの仲間となる候補者です。神に向けたあの天の声と、来たるべき栄光の務めとを、今からもう学んでいるのです。3:5 ここまでは、神の栄光に関わることです。一方、わたしたちの願いに関わることで言えば、『御名が聖とされますように』と言うとき、願っているのは次のことです。神のうちにいるわたしたちのうちで、御名が聖とされること。同時に、神の恵みがなお待っているほかの人々のうちでも、聖とされることです。こうして、すべての人のために、敵のためにさえ祈って、あの命令にも従うのです（マタイ五・四四）。ですから、わたしたちは言い方を宙に浮かせて、『わたしたちのうちで聖とされますように』とは言いません。そうして、すべての人のうちで、と言っているのです。

4:1 この形に従って、わたしたちは続けて『みこころが天にも地にも行われますように』と言います。それは、だれかが邪魔をして神のみこころが行われないので、神のために、みこころがかなうよう祈る、というのではありません。そうではなく、すべての人のうちで、みこころが行われるようにと願うのです。4:2 天と地を、霊と肉のたとえと解き明かせば、わたしたち自身が天であり、地だからです。もっとも、文字どおりに取っても、願いの意味は同じです。神のみこころが、地にいるわたしたちのうちで行われ、そうして天でも行われうるように、ということです。4:3 神が望まれるのは、わたしたちが神の教えに従って歩むことのほかに、何があるでしょうか。ですから、わたしたちは、ご自分のみこころの実質と、それを行う力を、神がわたしたちに与えてくださるように願うのです。天においても地においても、わたしたちが救われるためです。神のみこころの極みは、ご自分の子となさった者たちの救いだからです。4:4 また、主が宣べ伝え、行い、耐え忍ぶことによって果たされた、あの神のみこころもあります。主ご自身が、ご自分の思いではなく、父のみこころを行う、と告げられました（ヨハネ六・三八）。ですから、主がなさったことは、疑いなく父のみこころでした。今わたしたちは、それを手本とするよう招かれています。わたしたちも宣べ伝え、行い、死に至るまで耐え忍ぶためです。4:5 これを果たすことができるには、神のみこころが要ります。また、『みこころが行われますように』と言うとき、わたしたちは、そのことで自分たちのためにもよいことを願っています。神のみこころには何の悪もないからです。それぞれの行いに応じて、何か思いに反することが下される場合でもそうです。4:6 この言葉で、わたしたちは、忍耐するよう自分自身に前もって言い聞かせてもいるのです。主も、受難の実際において、肉の弱さをご自分の肉で示そうとされました。そのとき、『父よ、この杯を取りのけてください』と言われました。そして思い直して、『しかし、わたしの思いではなく、みこころが成るようにしてください』と言われたのです（ルカ二二・四二）。4:7 主ご自身が、父のみこころであり、父の力でした。それでも、果たすべき忍耐を示すために、父のみこころにご自分をゆだねられたのです。

訳注

1 三つ目の『理によって』を補う版もある。ここではヨハネの祈りに欠けていたと読む。

祈りについて　5〜10章　御国、パン、ゆるし、試み、まとめ、付け加える願い

5:1『御国がきますように』も、『みこころが行われますように』と同じことに関わります。つまり、わたしたちのうちで、ということです。そもそも、神が支配しておられない時など、あるでしょうか。すべての王の心は、神の手のうちにあるのです（箴言二一・一）。5:2けれども、わたしたちは、自分のために願うことは何でも、神のこととして願います。神から待ち望むものを、神のものとして言うのです。ですから、主の御国が現れることは、神のみこころと、わたしたちの待ち望む思いとに関わっています。それなのに、どうして世がしばらく引き延ばされるよう願う人々がいるのでしょうか。わたしたちが来るようにと祈る神の国は、世の終わりに向かっているのです。5:3わたしたちは、早く王として治めることを願い、これ以上長く仕えることは願いません。たとえ祈りの中で、御国の到来を求めるよう定められていなかったとしても、わたしたちは自分から、その言葉を口にしたでしょう。自分の望みを抱きしめようと、急いでいるからです。5:4殉教者たちの魂は、祭壇の下で、嘆き訴えて主に叫んでいます。『主よ。いつまで、地に住む者に対して、わたしたちの血の報復をなさらないのですか』（黙示録六・九〜一〇）。彼らの報復は、もちろん世の終わりに果たされるよう定められているのです。5:5それどころか、主よ、あなたの御国が、一刻も早く来ますように。御国は、キリスト者の願いであり、異邦人には恥、天使たちには喜びです。わたしたちは、そのために苦しい戦いをしています。いや、むしろ、そのために祈っているのです。

6:1それにしても、神の知恵は、祈りの順序をなんと見事に整えたことでしょう！　天のこと、すなわち神の名、神のみこころ、神の国の後で、地上の必要にも、願いの場所を与えたのです。6:2主も、前もってこう告げておられました。『まず御国を求めなさい。そうすれば、これらのものも添えて与えられるであろう』（マタイ六・三三）。もっとも、『わたしたちの日ごとのパンを、きょうお与えください』は、むしろ霊の意味に取りましょう。キリストこそ、わたしたちのパンです。キリストは命であり、パンもまた命だからです。6:3主は、『わたしが命のパンである』と言われます（ヨハネ六・三五）。また、その少し前では、パンとは天から下ってきた、生ける神の言葉である、と言われます（ヨハネ六・三三）。さらに、主のからだはパンのうちにあるとされます。『これはわたしのからだである』と言われたからです（マタイ二六・二六、ルカ二二・一九）。6:4ですから、わたしたちは日ごとのパンを求めて、キリストのうちにいつまでもいることを願っています。そのからだから離れないことも願っているのです。しかし、この言葉は肉の意味にも受け取られます。そう取るにしても、霊の教えへの敬虔な思いを欠いてはなされません。6:5主はパンを求めるよう命じられます。信じる者に必要なのは、パンだけだからです。ほかのものは、異邦人が求めるのです（マタイ六・三二）。主は、このことを実例で教え込み、たとえで繰り返し説かれます。父親が子供たちのパンを取り上げて、犬にやるだろうか、と言われるときです（マタイ一五・二六）。6:6また、子がパンを求めるのに、石を与えるだろうか、とも言われます（マタイ七・九）。子供たちが父に何を期待するかを、示しておられるのです。真夜中に戸をたたいたあの人も、パンを求めてたたいたのです（ルカ一一・五〜八）。また、主が『きょうお与えください』と付け加えられたのも当然です。何を食べようかと、あすのことを思いわずらうな、と前もって言っておられたからです（マタイ六・三一、三四）。6:7主は、このことに、ある人のたとえも当てはめられました。その人は、作物が豊かに実ったので、倉を大きくし、長く安心して暮らすことを考えました。ところが、その夜のうちに死ぬのです（ルカ一二・一六〜二〇）。

7:1神の気前よさを見たのですから、続いて神の寛大さをも願うのが、当然の順序でした。食べ物は何の役に立つでしょうか。わたしたちがそれで養われるのが、まさに、いけにえの雄牛が太らされるのと同じだとしたらです。主は、ご自分だけが罪のない者であることを、知っておられました。7:2そこで主は、『わた

したちの負債をおゆるしください』と願うよう教えられます。ゆるしを願うことは、告白です。ゆるしを願う者は、罪を言い表すからです。こうして、悔い改めが神に受け入れられるものであることも、示されます。神は、罪びとの死よりも、悔い改めを望まれるからです（エゼキエル一八・二三、三三・一一）。7:3 聖書では、負債は罪のたとえです。罪も負債と同じく、裁きに対して負うものであり、裁きによって取り立てられるからです。そして、取り立てを免じてもらわないかぎり、取り立ての正しさを逃れることはできません。あの僕の負債を、主人が免じてやったとおりです（マタイ一八・二七）。7:4 このたとえ全体が、このことを指しています。主人に解き放たれた同じ僕が、自分に負債のある者を同じようにはゆるしません。そのために主人のもとへ訴え出られ、最後の一コドラントまで、つまりどんな小さな罪までも支払うよう、獄吏に引き渡されます（マタイ一八・二八～三四、五・二六）。これは、わたしたちも自分に負債のある者をゆるすと言い表していることに、当てはまるのです。7:5 主は、ほかの所でも、この祈りの形に沿って、『ゆるしてやれ。そうすれば、自分もゆるされるであろう』と言われます（ルカ六・三七）。また、ペテロが、兄弟を七たびゆるすべきかと尋ねたとき、主は『いや、七たびを七十倍まで』と言われました（マタイ一八・二一～二二）。律法を、よりよいものに作り変えるためでした。創世記では、カインについては七たび、レメクについては七たびを七十倍の復讐が定められていたのです（創世記四・一五、二四）。

8:1 主は、これほど簡潔な祈りを満ちたものにするため、さらに付け加えられました。罪のゆるしだけでなく、罪がすっかり遠ざけられることも、わたしたちが願うようにです。『わたしたちを試みに引き入れないでください』です。これは、わたしたちが引き入れられるのを許さないでください、ということです。引き入れるのは、もちろん、試みる者です。8:2 主が試みる方だと思われることなど、あってはなりません。それではまるで、主が各人の信仰をご存じないか、人を倒そうと望んでおられるかのようです。弱さも悪意も、悪魔のものです。主がアブラハムに、子を供え物としてささげるようお命じになったのも、信仰を試みるためではなく、明らかに示すためでした（創世記二二・一～二）。アブラハムによって、やがてお命じになる戒めの手本を示されたのです。どんないとしい者も神より大事にしてはならない、という戒めです（マタイ一〇・三七）。8:3 主ご自身も、悪魔に試みられ（マタイ四・一）、試みの主宰者、試みを仕組む者がだれであるかを示されました。主は後の言葉で、このことを確かなものにされます。試みられないように祈りなさい、と言われたのです（ルカ二二・四六）。弟子たちは、主を見捨てるほどに試みられました。祈りよりも眠りにふけっていたからです。8:4 そこで、結びの句がこれに答え、『わたしたちを試みに導かないでください』が何を言うのかを解き明かします。それは、『しかし、わたしたちを悪しき者から引き離してください』ということなのです。

9:1 わずかな言葉を切り詰めた中で、なんと多くのものに触れていることでしょう！　預言者たちや福音書や使徒たちの命じること、主の言葉、たとえ、手本、戒め。同時に、なんと多くの務めが果たされることでしょう！　父という呼び名には、神への誉れがあります。御名には信仰のあかしが、みこころには従順のさげ物があります。御国には望みを思い起こすことが、パンには命を求めることがあります。ゆるしを乞う願いには負債の告白が、守りを求める願いには試みへの気づかいがあります。9:2 驚くことがあるでしょうか。神だけが、ご自分がどのように祈られたいかを教えることがおできになったのです。ですから、神ご自身が定められた祈りという礼拝は、神の口から出たときすでに、神の霊によって命を吹き込まれていました。そして、自らの特権によって天に昇り、子がお教えになったことを、父に取り次ぐのです。

10:1 けれども、主は人間の必要を見通しておられます。それで、祈りの教えをお伝えになった後に、別に『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』と言われました（マタイ七・七、ルカ一一・九）。また、各人の事情に応じて求めるべきこともあります。ですから、定められた普通の祈りを、土台として先に置きます。そのうえで、あとから加わる望みには、外側に願いを積み上げる権利があるのです。ただし、戒めを覚えたうえでのことです。

祈りについて　11〜19章　兄弟との和解、手を洗うこと、祈りの姿、口づけ、見張りの日

11:1 戒めから遠ざかれば、それだけ神の耳からも遠ざかります。そうならないように、戒めを覚えていることが、祈りのために天への道を敷くのです。戒めの中で第一のものは、こうです。兄弟たちとのあいだに争いや仲たがいを生じたなら、それを解いてからでなければ、神の祭壇に上ってはなりません（マタイ五・二三〜二四）。11:2 平和なしに神の平和に近づくとは、どういうことでしょうか。人の負債をゆるさないままで、自分の負債のゆるしに近づくとは。兄弟に怒っている者が、どうして父をなだめられるでしょうか。わたしたちには、初めからすべての怒りが禁じられているのです。11:3 ヨセフも、父を連れて来させるために兄弟たちを送り出したとき、道で怒ってはならない、と言いました（創世記四五・二四）。もちろん、これはわたしたちに勧めたのです（わたしたちの教えは、ほかの所で「道」と呼ばれています）。祈りの道にあるときに、怒りを抱いて父のもとへ進んではならない、と勧めたのです。11:4 その後、主は律法を押し広げ、兄弟への怒りを、はっきりと人殺しの上に重ねて置かれました（マタイ五・二一〜二二）。悪い言葉で怒りを晴らすことさえ、お許しになりません。怒らなければならないことがあっても、日が沈むときを越えてはなりません。使徒が勧めているとおりです（エペソ四・二六）。11:5 兄弟に償いをしないでいるあいだ、祈らずに一日を過ごすのは、どれほど向こう見ずなことでしょうか。怒りを抱き続けて、祈りをむだにするのも同じです。

12:1 祈りの思いは、怒りからだけでなく、精神のあらゆる乱れから、まったく自由でなければなりません。祈りは、それが送られる先の霊と同じような霊から、送り出されるべきです。汚れた霊が、聖なる霊に認められることはありません。悲しむ霊が喜ぶ霊に、縛られた霊が自由な霊に認められることもありません。だれも敵を迎え入れはしません。だれも、自分と等しい者しか受け入れないのです。

13:1 それにしても、手は洗っても、霊は汚れたまま祈りに臨むことに、どんな理があるでしょうか。手そのものにも、霊の清さが必要なのです。手は、偽りや殺しや残酷さや毒や偶像礼拝、そのほかの汚れから清いままで上げられなければなりません（第一テモテ二・八）。これらの汚れは、霊のうちに宿り、手のわざによって行われるのです。13:2 これが本当の清さです。多くの人が迷信のように気にかける清さではありません。彼らは、全身を洗う浴場から来たときでさえ、祈るたびに水を取るのです。わたしがこのことを念入りに尋ね、理由を求めたところ、それは主が引き渡されたことの記念[1]だと分かりました。13:3 わたしたちは主を拝むのであって、引き渡すのではありません。むしろ、引き渡した者の手本には逆らうべきで、そのために手を洗うべきではないのです。ただし、人とのつきあいで付いた汚れが、良心から洗う理由になるなら別です。そうでなければ、手は十分に清いのです。わたしたちは、キリストのうちで一度、体ごと手を洗ったのですから。

14:1 イスラエルは、毎日からだのすべてを洗っても、決して清くはなりません。たしかに、その手はいつまでも汚れており、預言者たちと主ご自身の血に、永遠に染まっています。ですから、彼らは父祖の罪にあずかり、その罪を受け継いだ者なので、手を主に向かって上げることさえ、あえてしません。イザヤのような者が叫び声を上げ（イザヤ一・一五）、キリストが身ぶるいされることのないようにです。14:2 しかし、わたしたちは手を上げるだけでなく、広げもします。そして、主の受難にかたどられた姿で、祈りながらキリストをほめたたえるのです。

15:1 さて、中身のない習わしの一つに触れたので、ほかのものも、ためらわずに指摘しておきましょう。それらがむなしいと責められるのは当然です。主の戒めであれ使徒の戒めであれ、何の戒めの権威にもよらずに行われているからです。15:2 このようなことは、敬虔ではなく、迷信に数えられます。それはわざと

らしく、無理にこしらえたもので、理にかなった務めというより、余計な詮索から出た務めです。少なくとも、異教徒と同じことをしているという点だけでも、やめさせるべきです。たとえば、ある人々は上着を脱いで祈ります。異邦人は、そうして偶像に近づくのです。15:3もしそうすべきなら、祈るときの身なりについて教えている使徒たちが、そのことも教えに含めたはずです。それとも、パウロは祈りのときに上着をカルポのところに置いてきた（第二テモテ四・一三）、とでも考える人がいるのでしょうか。神は上着を着た者の祈りはお聞きにならない、というのでしょう。バビロンの王の炉の中で、三人の聖徒が外套と帽子を着けたまま祈ったときには、その祈りを聞き入れられたのにです（ダニエル三・二一）。

16:1また、祈りをささげ終えると座る習わしの人々がいますが、わたしには、その理由が分かりません。子供が考えそうな理由のほかにはです。あのヘルマスの書は、たいてい『牧者』と題されています。もしヘルマスが、祈り終えて寝台に腰を下ろさず、何かほかのことをしていたとしたら、どうでしょう。わたしたちは、それも守るべき習わしだと言い張るのでしょうか。16:2もちろん、そうはしません。あそこには『わたしが祈り、寝台に腰を下ろしていると』と書かれています。しかし、それはただ話の順序を述べただけで、教えの手本として書かれたのではありません。そうでなければ、寝台のある所でしか祈ってはならないことになります。16:3それどころか、椅子や腰掛けに座る者は、あの書に背くことになるのでしょう。さらに、異邦人も同じことをしています。小さな像を拝んだ後で、座り込むのです。そうであれば、偶像のもとで行われていることだという、まさにその理由で、わたしたちがそうするのは責められて当然です。16:4そのうえ、不敬の罪も加わります。異邦人でさえ、少しでも分別があれば、それが分かるはずです。あなたが最も敬い、あがめる人の目の前で、その人に向かって座り込むのは、不敬なことです。まして、生ける神の目の前で、祈りの天使がまだそばに立っているのに、そうするのは、どれほど不信心なことでしょうか。祈りで疲れたと、神に当てつけているのなら、話は別ですが。

17:1むしろ、慎みとへりくだりをもって祈るほうが、わたしたちの願いは神に受け入れられやすくなります。手さえ高く上げすぎず、ほどよく、つつましく上げます。顔も、あつかましく上げはしません。17:2あの取税人は、言葉だけでなく顔もへりくだり、うなだれて祈りました。それで、ひどく厚かましいパリサイ人よりも義とされて、帰って行ったのです（ルカ一八・一三〜一四）。声の調子も、低く抑えるべきです。もし声の大きさで聞かれるのなら、どれほど太いのどが要ることでしょうか。17:3神は、声ではなく心を聞かれる方です。心を見られる方であるのと同じです。ピュトの神託のダイモンは、「口のきけない者の言うことも分かり、話さない者の言うことも聞き取る」と言っています。神の耳は、音を待っているのでしょうか。17:4それなら、ヨナの祈りは、どうして天にまで届くことができたのでしょうか。大魚の腹の底から、これほど大きな獣のはらわたを通り、淵の底から、これほどの海の水の重なりを通ったのです（ヨナ二・一〜二）。声高に祈る人々は、近くの人のじゃまになること以外に、何を得るのでしょうか。17:5それどころか、自分の願いを人に漏らしてしまうのですから、人前で祈るのと、どこが違うのでしょうか（マタイ六・五〜六）。

18:1また、別の習わしも広まっています。断食している人々が、兄弟たちと祈りを終えた後、平和の口づけを控えるのです。平和の口づけは、祈りに押す印なのにです。しかし、兄弟たちと平和を交わすべきなのは、断食のわざのときをおいて、いつでしょうか。そのときにこそ、祈りはいっそう受け入れられるものとなって昇っていきます。そこで兄弟たちも、わたしたちのわざにあずかり、それにひたされて、自分の平和を兄弟と分かち合うようになるのです。18:2聖なる口づけと別れた祈りが、どうして完全でしょうか。主への務めを果たしている人を、平和がどうして妨げるでしょうか。人が平和なしに立ち去る供え物とは、どんな供え物でしょうか。「祈りがどのようなものであれ、自分の断食を隠すよう命じた戒めを守ることより、重いことはない（マタイ六・一六〜一八）」と、人は言うでしょう。18:3けれども、口づけを控えることで、わたしたちはもう、断食していると知られてしまうのです。それでも、口づけを控えるのに何か理由があるとしましょう。その場合でも、この戒めに対して罪ある者とならないように、こうすればよいのです。家で、断食をまったく隠しておけない人々のあいだにたまたまいるなら、平和の口づけを延ばしてもかまいません。18:4しかし、ほかのどこでも、自分のわざを隠せる所では、戒めを覚えていなければなりませ

ん。そうすれば、外では教えに、家では習わしに応えることになります。同じように、過越の日には、断食という礼拝が皆に共通の、いわば公のものなので、わたしたちが口づけをやめるのは当然です。皆と一緒にしていることを、隠そうと気にかけることはないのです。

19:1 同じように、見張り（スタティオ）の日にも、供え物の祈りに加わるべきではないと考える人が多くいます。主のからだを受ければ、見張りが解かれてしまうというのです。では、聖餐は、神にささげた従順を解いてしまうのでしょうか。それとも、むしろ神に結びつけるのでしょうか。19:2 神の祭壇のそばにも立つなら、あなたの見張りは、いっそう厳かなものになるのではありませんか。主のからだを受けて、それを取っておけば、両方とも保たれます。供え物にあずかることも、務めを果たすことも保たれるのです。19:3 見張りが兵士の例から名を取ったのなら（わたしたちも神の兵役に就いているのです）、陣営に喜びや悲しみが起こっても、兵士の見張りが取りやめになることはありません。喜びのときはいっそう進んで、悲しみのときはいっそう気を配って、規律を守るからです。

訳注

1 ある写本は、ピラトが手を洗ったこと（マタイ二七・二四）の記念と読む。

祈りについて　20〜22章　女性の身なり、おとめのおおい

20:1 さて、女性たちの身なりについてだけは、守り方がまちまちです。そのため、わたしたちは、いとも聖なる使徒の後で、厚かましくもこのことを論じ直すことになります。まったく取るに足りない者なのにです。もっとも、使徒に従って論じ直すのなら、厚かましくはありません。20:2 装いと飾りの慎みについては、ペテロにもはっきりした定めがあります。ペテロは、パウロと同じ霊によっているので、同じ口で戒めています。衣の誇りも、金のおごりも、取り持ち屋のような髪の凝りようもです（第一ペテロ三・三、第一テモテ二・九）。

21:1 しかし、どの教会でもまちまちに守られていて、定まっていないかのようなことがあります。それを論じ直さなければなりません。おとめはおおいをかけるべきか、そうでないか、ということです。おとめに頭のおおいを免じる人々は、次のことに拠っているようです。使徒は、おとめを名指しせず、婦人（ムリエル）がおおいをかけるべきだと示した（第一コリント一一・五）。それも、女性（フェミナ）と言って性そのものを示したのではなく、婦人と言って、性の中の一つの段階を示した、というのです。21:2 もし性の名を挙げて女性と言っていたなら、すべての婦人について、例外なく定めたことになる。けれども、性の一つの段階を名指しているので、もう一つの段階は、黙っていることで分けている。そう考えるのです。「使徒は、おとめの名もとくに挙げることができた。あるいは手短に、まとめて女性と言うこともできた」と、彼らは言います。

22:1 そう認める人々は、その語そのものの意味を考え直すべきです。婦人とは何であるかを、聖なる書き物の最初の部分から考え直すのです。そうすれば、それが性の名であって、性の段階の名ではないことが分かります。神は、まだ男を知らないエバを、婦人とも女性とも名づけられたのですから（創世記二・二三）。女性は性を一般に言う名として、婦人は性の段階を特に言う名として、です。22:2 こうして、そのときまだ嫁いでいなかったエバが婦人の名で呼ばれたので、その名はおとめにも共通のものとなりました。ですから、使徒が婦人という語を置いて、同じ言葉を使ったのも、不思議ではありません。使徒は、聖書のすべてと、なかでもあの創世記を書き記させたのと同じ霊に動かされていたのです。その語は、嫁いでいないエバの例によって、おとめにも当てはまります。22:3 ほかのこともみな、これと調和します。使徒は、結婚について教える別の箇所のようには（第一コリント七・三四）、おとめの名を挙げませんでした。まさにそのことによって、すべての婦人と、性の全体について言ったのだと、十分に告げているのです。婦人とおとめとのあいだに区別はない、と告げているのです。おとめの名をまったく挙げないのですから。22:4 というのも、使徒は、ほかの所では、違いがそれを求めるときに、区別することを忘れていません。そこでは、二つの種類をそれぞれの名で呼んで区別しています。その使徒が、両方の名を挙げずに区別しないところでは、何の違いも認めさせるつもりはないのです。22:5 さらに、こういうこともあります。使徒が手紙を書いたギリシア語では、婦人と呼ぶことも女性と呼ぶことも、同じくふつうに行われています。すなわち、「ギュネー」と呼ぶことも「テーレイア」と呼ぶことも、です。ですから、この語が性の名としてよく使われ、訳せば女性に当たるのなら、使徒は「ギュネー」と言って、性を名指したのです。22:6 性の中には、おとめも含まれます。しかも、はっきりした宣言があります。祈り、また預言するとき、頭におおいをかけないすべての婦人は、自分の頭をはずかしめる、と使徒は言うのです（第一コリント一一・五）。すべての婦人とは、あらゆる年齢、あらゆる身分、あらゆる境遇の婦人でなくて、何でしょうか。22:7 使徒は『すべての』と言うことで、婦人のだれをも除いていません。おおいをかけてはならない男について、だれをも除いていないのと同じです。同じように、すべての男と言っているのですから（第一コリント一一・四）。ですから、男の性では、男の名のもとに、まだ大人にならない少年も、おおいをかけることを禁じられています。それと同じく、女の性では、婦人の名のもとに、おとめもおおいをかけるよう命じられているのです。

22:8 男女どちらの性でも等しく、年の若い者は、年長の者の教えに従うべきです。さもなければ、女のおとめたちがおおいをかけないのなら、男のおとめたちにもおおいをかけさせるがよいのです。男のおとめたちも、名指しで定められてはいないのですから。婦人とおとめが別のものだというなら、男と少年も別のものとすればよいのです。22:9 たしかに使徒は、天使たちのためにおおいをかけるべきだと言います（第一コリント一一・一〇）。天使たちが、人の娘たちのために神から離れたからです（創世記六・二）。それなら、こう言い張る人がいるでしょうか。情欲をかき立てるのは婦人だけ、つまり、すでに嫁いでおとめであることを終えた者だけだ、と。おとめには、美しさで際立つことも、恋する者を見つけることも許されない、というのなら、話は別ですが。22:10 むしろ、天使たちが欲したのは、おとめだけではなかったか、考えてみましょう。聖書は人の娘たちと言っています。人の妻たちとも、区別なく女性たちとも言えたはずなのにです。また、『妻にめとった』と言っているのも（創世記六・二）、同じことを示しています。妻にめとられるのは、もちろん、夫のない者だからです。22:11 夫のある者のことなら、ほかの言い方をしたはずです。ですから、夫のないのは、やもめであることによっても、おとめであることによってもです。このように、聖書は一般に娘たちと言って性を名指し、種類を類の中に混ぜ合わせたのです。また、使徒は、女性はおおいをかけるべきだと自然そのものが教える、と言います。自然は、髪をおおいとして、また飾りとして、婦人たちに与えたのです（第一コリント一一・一四～一五）。それなら、同じおおいと同じ頭の誉れは、おとめたちにも与えられているのではありませんか。22:12 婦人にとって髪をそるのが恥であるなら、おとめにとっても同じです（第一コリント一一・六）。ですから、頭について同じありさまが割り当てられている者たちには、頭についての同じ教えも求められます。幼さにかばわれているおとめたちにも、それは及びます。初めから女性と名づけられているのですから。22:13 実際、イスラエルもそのように守っています。たとえ守っていなくても、わたしたちの掟は、押し広げられ、補われたものです。ですから、この付け加えを自分の権利として主張できるでしょう。掟がおとめたちにもおおいをかけさせるとしても、それは許されてよいはずです。今は、自分の性を知らない年だけが、素朴さの特権を持つがよいのです。22:14 というのも、エバとアダムも、分別がつくと、すぐに自分たちが知ったものをおおったのです（創世記三・七）。たしかに、幼さがもう移り変わった者たちでは、その年は、自然に対して務めを果たしています。同じく、教えに対しても務めを果たすべきです。22:15 そのような者たちは、体においても務めにおいても、婦人たちの仲間に移されるのです。嫁ぐことができるようになったときから、だれも、もうおとめではありません。その人のうちでは、年がすでに、時という自分の夫に嫁いだのですから。22:16 しかし、神に身をささげたおとめもいます。その人は、それ以来、髪の形も変え、身なりもすべて婦人のものに改めています。それなら、そのことを最後まで貫き、おとめとしての務めもすべて果たすがよいのです。神のために隠しているものは、すっかりおおうがよいのです。22:17 神の恵みが行わせることは、神おひとりの知るところにだけゆだねるのが、わたしたちのためです。神から望むものを、人から受けて埋め合わせることのないためです。あなたは、人の前ではおおっているものを、なぜ神の前ではあらわにするのですか。22:18 教会の中より、人前でのほうが慎み深くするのですか。それが神の恵みであって、あなたがそれをもらっているのなら、『なぜもらっていないもののように誇るのか』と使徒は言います（第一コリント四・七）。自分を見せることで、なぜほかの人たちを裁くのですか。それとも、自分の誇りによって、ほかの人たちを善へ誘っているのですか。22:19 けれども、誇るなら、あなた自身もそれを失う危険を冒し、ほかの人たちをも同じ危険に追いやるのです。誇りたい思いから身に着けたものは、たやすく打ち砕かれます。おとめよ、おとめであるなら、おおいをかけなさい。顔を赤らめるべきなのですから。22:20 おとめであるなら、多くの目にさらされることを受け入れてはなりません。だれにも、あなたの顔に見とれさせてはなりません。だれにも、あなたの偽りに気づかせてはなりません。頭をおおうなら、あなたは見事に、嫁いだ者を装うことになります。いや、偽っているようには見えません。あなたはキリストに嫁いだのですから。22:21 あなたは自分の肉をキリストにゆだねたのです。夫の教えに従ってふるまいなさい。キリストが、他人の妻たちにおおいをかけるよう命じておられるなら、ご自分の妻たちには、なおさらのことです。「しかし、めいめいが、先人の定めを動かしてよいと思うべきではない」と、人は言うでしょう。22:22 け

れども、多くの人が、自分の思慮を教会に合わない習わしにゆだね、その習わしを堅く守り通しているのです。おとめたちが、おおいをかけるよう強いられないとしましょう。それでも、自分から望む者たちを禁じてはならないことは、たしかです。その人たちは、おおいをかけても、自分がおとめであることを否むことはできません。神の前の良心の安らかさがあるので、自分の評判を損なうことに甘んじているのです。22:23 けれども、婚約者にささげられたおとめたちについては、わたしの規則を別にしても、きっぱりと宣言し、証言することができます。口づけと右手を交わして、初めて男の体に触れておののいたその日から、おおいをかけるべきです。22:24 そのような者たちのうちでは、すべてが前もって嫁いでいるのです。年は成熟によって、肉は年によって、霊は自覚によって嫁いでいます。恥じらいは口づけの経験によって、望みは待つことによって、思いは意志によって嫁いでいます。22:25 リベカが、わたしたちには十分な手本です。リベカは、花婿を示されて、ただその人を知っただけで、嫁ぐためにおおいをかけたのです（創世記二四・六五）。

祈りについて　23〜29章　膝をつくこと、祈りの場所と時、霊のいけにえ、祈りの力

23:1 膝をつくことについても、祈りの守り方はまちまちです。安息日に膝をつくのを控える、ごくわずかの人々がいるからです。この対立は、ちょうど今、諸教会の前で申し開きをしているところです。主は恵みをお与えになるでしょう。その人々が譲るか、ほかの人々をつまずかせずに自分の考えを用いるかするようにです。23:2 けれども、わたしたちは受け継いだとおりにします。主の復活の日にだけは、膝をつくことばかりでなく、憂いを表すどんな姿勢や務めも避けなければなりません。仕事さえ先に延ばして、悪魔に機会を与えないようにするのです（エペソ四・二七）。23:3 五旬節の五十日のあいだも、同じです。わたしたちは、この期間も同じ喜びの祝いとして、ほかの日と分けて過ごすからです。とはいえ、どの日にも、少なくとも光の中へ入っていく最初の祈りで、神の前にひれ伏すことを、だれがためらうでしょうか。断食と見張りの日には、どの祈りも、膝をつき、そのほかのへりくだりの作法も守ってささげなければなりません。23:4 わたしたちは、ただ祈るだけでなく、ゆるしを請い、わたしたちの主である神に償いをするのですから。祈りの時については、何も定められていません。ただ、いつでも、どこでも祈るように、とあるだけです。

24:1 しかし、人前で祈ることを禁じられているのに（マタイ六・五〜六）、どうして、どこででも祈れるのでしょうか。使徒が『どんな場所でも』と言うのは（第一テモテ二・八）、折よく、あるいはやむをえず、居合わせることになった場所のことです。というのも、使徒たちは牢の中で、囚人たちが聞いているところで神に祈り、さんびを歌いました（使徒一六・二五）。それも、戒めに背くとは見なされていないのです。パウロ自身が、そう見なしていないのです。パウロは船の中で、みんなの前で神に感謝したのですから（使徒二七・三五）。

25:1 時については、ふだんの暮らしから取り入れて、ある時刻を守ることも、むだではないでしょう。わたしが言うのは、一日の区切りを示す、だれもが知っているあの時刻です。第三時、第六時、第九時、すなわち今の午前九時、正午、午後三時です。これらの時刻は、聖書の中で、とくに厳かな時として見いだされます。25:2 聖霊が、集まっていた弟子たちに初めて注がれたのは、第三時でした（使徒二・一五）。ペテロは、あの入れ物の中に、ありとあらゆる清くないものを見る幻を受けた日、祈るために第六時に屋上に上っていました（使徒一〇・九〜一四）。25:3 また、同じペテロはヨハネと共に、第九時に宮へ行き、そこで足のきかない人を、もとの健やかさに戻しました（使徒三・一〜八）。これらの例は、何かを守れという戒めもなく、ただそう書かれているだけです。それでも、前もって何かの決まりを立てておくのは、よいことでしょう。その決まりが、祈れという促しを強めます。そして、いわば掟のように、ときには仕事からわたしたちを引き離して、この務めに向かわせるのです。こうして、少なくとも日に三度は祈ることになります。ダニエルも、そう守っていたと読むとおりです（ダニエル六・一〇）。これはもちろん、イスラエルの教えによることでした。わたしたちが三度祈るのは、三つの方、父と子と聖霊とに負債のある者だからです。もちろん、定めの祈りは別です。それは、何の促しがなくても、光と夜が始まるときにささげるべきものです。25:4 また、信者たちには、祈りを間にはさんでからでなければ、食事をとらず、浴場にも行かないことがふさわしいのです。霊の憩いと糧を、肉のものより先にし、天のものを地のものより先にすべきだからです。

26:1 あなたの家に入ってきた兄弟を、祈りなしに帰してはなりません。『あなたは兄弟を見た。あなたの主を見たのだ』と言われています。とくに旅人なら、なおさらです。もしかすると、天使かもしれないのですから（ヘブル一三・二）。また、あなた自身も兄弟たちに迎えられたら、地の憩いを天の憩いより先にしてはなりません。26:2 たちまち、あなたの信仰が問われることになります。また、家の人々と互いに平安を返し合わないなら、どうして戒めのとおりに『平安がこの家にあるように』と言えるでしょうか（ルカ一〇・五）。

27:1 祈りに熱心な人々は、祈りの中にハレルヤや、その種の詩篇を添えるのを習わしにしています。その詩篇の結びの句には、一緒にいる人々が答えて唱えるのです。神を何よりも先にし、神をあがめるために、たっぷりと満ちた祈りを、肥えたいけにえのように神のもとへ運ぶ。そうするのにふさわしい定めは、どれもまったく最上のものです。

28:1 これこそ、昔の供え物を消し去った、霊のいけにえです。主は、あなたがたの多くの供え物が、わたしに何になろうか、と言われます。わたしは雄羊の燔祭に飽いている、小羊の脂肪も、雄牛と雄やぎの血も望まない、と言われるのです（イザヤ一・一一）。28:2 だれが、あなたがたの手から、これらを求めたのか、とも言われます（イザヤ一・一二）。では、神が何を求められたのかは、福音が教えています。主は、『まことの礼拝をする者たちが、霊とまことをもって父を礼拝する時が来る』と言われます（ヨハネ四・二三）。28:3 神は霊だからです。それで、そのような礼拝をする者たちを求めておられるのです（ヨハネ四・二三〜二四）。わたしたちこそ、まことの礼拝をする者、まことの祭司です。霊によって祈り、霊によって、祈りをいけにえとしてささげるのです。祈りこそ、神ご自身のものである、受け入れられるいけにえです。神が求められ、ご自分のために備えられたいけにえなのです。28:4 この祈りを、わたしたちは心を尽くしてささげなければなりません。信仰で養い、まことで整え、潔白で傷のないものとし、純潔で清め、愛の冠をかぶせるのです。そして、善いわざの行列とともに、詩篇と賛歌のうちに、神の祭壇へ導いていかなければならないのです。この祈りが、神からすべてを得させてくれます。

29:1 霊とまことから来る祈りに、それを求めておられる神が、何を拒まれたことがあるでしょうか。わたしたちは、その効き目の証しがどれほど多いかを読み、聞き、信じています。昔の祈りも、火から、獣から、飢えから救い出していました。しかも、まだキリストから形を受けていなかったのです。29:2 まして、キリスト者の祈りは、どれほど大きな働きをすることでしょう。キリスト者の祈りは、火のただ中に露の天使を立たせることはしません[1]。獅子の口をふさぐことも（ダニエル六・二二）、農夫たちの昼食を飢えた者のもとへ運ぶこともしません。ゆだねられた恵みによって、苦しみの感覚を取り去ることもしません。そうではなく、苦しむ者、感じる者、痛む者を、忍耐によって備えさせ、力によって恵みを増し加えるのです。それは、信仰が主から何を得るのかを知り、神の名のために何を苦しむのかを悟るためです。29:3 昔の祈りは、災いをくだし、敵の軍勢を打ち破り、雨の恵みを止めることさえしました。けれども今、義の祈りは、神の怒りをすべてそらし、敵のために寝ずの番をし、迫害する者のために願うのです（マタイ五・四四）。29:4 祈りが天の水を引き出すすべを知っていても、驚くことでしょうか。火さえ得ることのできた祈りなのですから。祈りだけが、神に打ち勝つのです。しかし、キリストは、祈りが何の悪もなさないことをお望みになりました。善のために、あらゆる力を祈りにお与えになったのです。29:5 ですから、祈りが知っているのは、次のことだけです。死んだ人々の魂を死の道そのものから呼び戻し、弱った人々を立ち直らせ、病む人々をいやすことです。ダイモンに取りつかれた人々を清め、牢の門を開き、罪のない人々の鎖を解くことです。同じ祈りが、罪を洗い流し、試みを退け、迫害を消し止めます。気の弱い人々を慰め、心の大きい人々を喜ばせ、旅する人々を導き、波を静め、強盗をあぜんとさせます。貧しい人々を養い、富む人々を正しく導き、倒れた人々を起こし、倒れかかる人々を支え、立っている人々を保つのです。29:6 祈りは信仰の城壁であり、四方からわたしたちを見張っている敵に向かう、わたしたちの武具であり、飛び道具です。ですから、決して武具を持たずに出歩かないようにしましょう。昼には見張りを、夜には夜の番を覚えていましょう。祈りという武具のもとで、わたしたちの総司令官の軍旗を守り、祈りながら天使のラッパを待ちましょう（第一テサロニケ四・一六）。29:7 天使たちもみな祈り、造られたものはすべて祈ります。家畜も野の獣も祈り、膝をかがめます。小屋や洞穴から出てくると、口をむなしく閉ざさずに天を仰ぎ、それぞれの仕方で息を震わせるのです。29:8 鳥も、巣から飛び立つと、天に向かって身を起こし、手の代わりに翼を十字の形に広げ、祈りと思えるような何かを言います。では、祈りの務めについて、これ以上何を言うことがあるでしょうか。29:9 主ご自身もお祈りになったのです。この主に、誉れと力が世々限りなくありますように。

訳注

1 ダニエル書のギリシア語訳にだけある部分の話。

洗礼について　1〜4章　水の秘儀と、はじめの水

1:1 わたしたちの水の秘儀は、なんと幸いなことでしょう。かつての盲目の罪が洗い流されて、わたしたちは解き放たれ、永遠のいのちに入るのですから。この論述は、むだにはならないでしょう。今まさに教えによって形づくられている人々にも、教えを授けるからです。また、ただ信じたことに満足して、伝えられたことの理由を調べない人々もいます。その人々は、まだ吟味されていないが、認められてよい信仰を、知らないままに抱いています。その人々にも、教えを授けるのです。1:2 実際、つい最近も、ガイアナ派の異端の毒蛇である、ある女がここに来て暮らしました。そして、その猛毒の教えで、多くの人々をさらっていったのです。とりわけ、洗礼を打ち壊そうとしたのです。まったく、蛇の性分どおりです。毒蛇やまむし、さらにはバシリスクという蛇そのものも、たいてい乾いた、水のない所を好むからです。1:3 しかし、わたしたちは小さな魚です。わたしたちの「イクテュス」、すなわち「魚」であるイエス・キリストにならって、水の中で生まれるのです。そして、水の中にとどまっていなければ、救われないのです。だから、あの、このうえなく怪物じみた女[1]は、正しいことを教える権利さえなかったのに、魚を殺すすべはよく心得ていました。小さな魚を、水から取り出すのです。

2:1 それにしても、ひねくれた心が信仰を揺るがし、あるいはまったく受け入れないようにする力は、なんと大きいのでしょう。信仰を成り立たせているもの、そのものによって、信仰を攻めるのですから。神のわざは、行われるところを見れば単純で、その効き目として約束されるものは壮大です。この単純さと壮大さほど、人の心をかたくなにするものはありません。ここでもそうです。人は、これほど単純に、行列もなく、目新しい装いもなく、つまりは費用もかけずに、水に沈められます。わずかな言葉のうちに浸されて、見たところ、ほとんど、あるいは少しも清くならずに、上がってきます。それだけに、永遠を得ることが、いっそう信じがたいと思われるのです。2:2 偶像の祭りや秘密の儀式は、反対に、飾りと装いと費用で、自分への信用と権威を築き上げています。そうでないなら、わたしはうそを言っていることになります。ああ、みじめな不信仰よ。あなたは、神に固有のもの、すなわち単純さと力とを、神に認めないのです。2:3 では、どうでしょう。洗いによって死が洗い流されるのは、驚くべきことではないでしょうか。けれども、驚くべきことだからといって信じられないのなら、それだけいっそう信じるべきです。神のわざは、あらゆる驚きを超えるもの以外に、どんなものであるべきでしょうか。2:4 わたしたちもまた、驚きます。しかし、信じているから驚くのです。一方、不信仰は驚くだけで、信じません。単純なものはむなしいものとして、壮大なものは不可能なものとして驚くのです。たしかに、あなたの考えるとおりだとしましょう。その両方に対して、神の宣言が十分に先回りしています。2:5 神は、この世の知恵をはずかしめるために、この世の愚かなものをお選びになりました（第一コリント一・二七）。また、人にはきわめて難しいことも、神にはたやすいのです（マタイ一九・二六）。神は知恵があり、力もある方です。神を気にとめずに通り過ぎる人々でさえ、それは否みません。そうであれば、神がご自分の働きの材料を、知恵と力に逆らうものの中にお置きになったのは、もっともなことです。つまり、愚かさと不可能の中にです。どんな力も、自分に挑むものから、働くきっかけを得るのですから。

3:1 わたしたちは、この宣言を、いわば定めとして心に留めます。そのうえで、なおも、水によって造り直されることが、どれほど愚かで不可能なことかを論じます。この材料は、いったい何によって、これほど尊い務めにふさわしいとされたのでしょうか。思うに、この流れる元素の権威を、確かめなければなりません。3:2 ところが、その権威はふんだんにあります。それも、はじめからです。水は、世界のあらゆる飾りより前に、まだ磨かれていない姿のまま、神のもとに休んでいたものの一つなのです。『はじめに神は天と地とを創造された』と言われています（創世記一・一）。3:3 『地は見えず、整っておらず、やみが淵のおも

てにあり、主の霊が水の上に運ばれていた』（創世記一・二）。人よ、ここにあなたは、まず、水の古さを敬う理由を持っています。古くからある実体だからです。次に、水の尊さを敬う理由を持っています。神の霊の座であり、そのころ、ほかの元素よりも喜ばれたものだからです。3:4 というのも、そのころ、やみはまだすっかり、星々の飾りもなく、形がありませんでした。淵は陰うつで、地は整えられず、天は荒削りでした。ただ水だけが、いつも完全な材料で、喜ばしく、単純で、それ自体で清く、神にふさわしい乗り物を、下から差し出していたのです。3:5 それに、その後、世界の配置も、いわば水が調子を整えることで、神によって成し遂げられました。神は、天のおおぞらを中ほどに浮かべるために、水を分けてそうなさいました。また、乾いた地を浮かべるために、水を引き離して、それをお果たしになりました（創世記一・六～一〇）。3:6 こうして世界が元素ごとに整えられ、そこに住むものが与えられることになりました。そのとき神は、まず水に、生き物を生み出すようお命じになりました（創世記一・二〇）。生きるものを最初に生み出したのは、水なのです。ですから、洗礼で水がいのちを与えるすべを知っていても、不思議ではありません。3:7 人そのものを形づくるわざも、水が加わって仕上げられたのではありませんか。材料は、土から集められました。けれども、湿って水気を含んでいなければ、使えるものにはなりません。その土を、四日目より前に自分の場所へ引き離された水が、残した湿り気で泥にして、こねたのです（創世記二・六～七）。3:8 ここから、この元素の権威について語れることを、すべて、あるいは多く挙げていくなら、どうなるでしょう。その力や恵みがどれほどか、どれほどの技があり、どれほどの務めがあり、世界にどれほどの備えをもたらすか。そうすれば、洗礼の理由ではなく、水の賛美を集めたように見えるのではないかと、わたしは恐れます。もっとも、そうすれば、なおのこと十分に教えられるでしょう。神は、ご自分のすべての物事とわざの中に配置なさった材料を、ご自分の秘儀の中でも従わせておられます。地上のいのちを治めるものが、天のいのちをも計らうのです。それを疑うべきではありません。

4:1 しかし、ここまで先に摘み取っておけば、十分でしょう。その中には、洗礼の理由のうち、あの最初のものも見いだされます。はじめから水の上に運ばれていた神の霊が、浸される者たちの水の上にとどまる、ということです。それは、すでにそのとき、その姿勢そのものによって、洗礼のひな型として前もって示されていました。4:2 聖なるものが、聖なるものの上に運ばれていたのです。あるいは、運ばれていたものから、運んでいたものが聖さを借り受けたのです。下に置かれた材料はどれも、上にかかるものの性質を、必ず取り込むからです。とりわけ、物体の材料は霊の性質を取り込みます。霊の性質は、その実体の細やかさによって、たやすく染み通り、宿るのです。4:3 こうして、水の本性は、聖なるものによって聖とされ、自分もまた聖とする力を宿しました。「では、わたしたちが浸されるのは、はじめにあった、あの水そのものだというのか」と、だれも言ってはなりません。もちろん、その水そのものではありません。ただし、類は一つでも種は多い、という点では、同じ水です。4:4 類に与えられたものは、種にもあふれ出ます。ですから、海で洗われるか池で洗われるか、川か泉か、湖か桶か、何の違いもありません。ヨハネがヨルダン川で浸した人々と（マタイ三・六）、ペテロがティベリス川で浸した人々とのあいだにも、何の差もないのです。4:5 ピリポは、道の途中で、たまたまあった水で、あの宦官を浸しました（使徒八・三六～三八）。その宦官が、救いをほかの人より多く、あるいは少なく得たというなら、話は別ですが。ですから、どの水も、起源のときからの古い特権によって、神を呼び求めると、聖とする秘儀にあずかるのです。4:6 霊がただちに天から臨み、水の上にとどまって、ご自身によって水を聖となさるからです。こうして聖とされた水は、聖とする力を吸い込みます。もっとも、単純な行いには、たとえも当てはまるでしょう。わたしたちは垢で汚れるように罪で汚れているので、水で洗われる、というたとえです。4:7 しかし、罪は肉には現れません。偶像礼拝や姦淫や詐欺の染みを、肌の上に帯びている人はいないからです。その一方で、そうした罪は、罪の張本人である霊において汚れているのです。4:8 霊が支配し、肉は仕えるからです。とはいえ、両者は罪責を分かち合います。霊は命じたために、肉は仕えたためにです。ですから、天使の仲立ちによって、水はいわば薬の効き目を受けます。そうして、霊は水の中で体のしかたで洗われ、肉は同じ水の中で霊のしかたで清められるのです。

訳注

1 古い版の多くは、ここでこの女を『クィンティラ』と名指す。

洗礼について　5〜8章　天使の仲立ちと、油と按手

5:1 霊の力を少しも理解しない異邦人たちも、水に同じ効き目を持たせる力を、自分たちの偶像のものとしています。しかし、彼らはやもめの水で自分を欺いているのです。というのも、彼らも、ある祭儀では洗いによって入信します。イシスだの、ミトラスだのの祭儀です。神々そのものも、洗いの儀式のために運び出します。5:2 そればかりか、彼らは至る所で水を持ち回って振りかけ、田舎の屋敷や家や神殿や、町全体を清めます。たしかに、アポロの遊戯やエレウシスの遊戯では、人々が浸されます。そして、それを生まれ変わりのため、偽りの誓いの罰を免れるために行うのだと思い込んでいます。5:3 また昔は、人殺しで身を汚した者はだれでも、清めの水を探し求めました。彼らは、水がもともと洗うための材料だという、ただ水の本性だけから、清めの吉兆を見て自分を喜ばせています。それなら、水の本性をすべて定められた神の権威によって、水はどれほど確かに、その清めを果たすでしょうか。5:4 宗教の力で水に薬の効き目を与えると彼らが考えるのなら、生ける神の宗教よりまさる宗教があるでしょうか。このことが分かれば、ここでも、神のわざに張り合う悪魔の熱心が見いだされます。悪魔も、自分の者たちのあいだで洗礼を行うのです。5:5 けれども、何が似ているでしょうか。汚れた者が清め、滅ぼす者が解き放ち、罪に定められた者が無罪を言い渡すのです。悪魔は、自分が吹き込んだ罪を洗い流して、自分の仕事を壊すことになるのでしょう。これらのことは、信仰を退ける人々への証しとして置かれています。彼らは、神に敵対する者のもとでは、神のわざのまねごとを信じています。それなのに神のわざそのものを少しも信じないなら、これが彼らへの証しになるのです。5:6 それに、ほかの場合にも、汚れた霊どもは何の秘儀もなしに、水の上にうずくまっているではありませんか。はじめに神の霊が水の上に運ばれていた、あのさまをまねているのです。薄暗い泉や人里離れた川、浴場の水槽や家の中の水路、あるいは水ためや井戸は、それを知っています。そうしたものは人をさらうと言われますが、もちろん、害をなす霊の力によってです。5:7 水に殺された者や、水のために狂気や恐れに苦しめられた者がいます。人々はその者たちを、「ニンフに取りつかれた者」「水の精に狂わされた者」「水を恐れる者」と呼びます。なぜ、こうしたことを述べたのでしょうか。神の聖なる天使が、人の救いのために水を整える場に立ち会うことを、だれも信じがたく思わないためです。悪い天使でさえ、人を滅ぼすために、同じ元素との汚れた交わりをしきりに結んでいるのですから。5:8 天使が水に仲立ちすることが目新しく思われるなら、来るべきことの先例が、すでに先立っています。天使が仲立ちして、ベテスダの池の水を動かしていたのです（ヨハネ五・二〜四）。病を嘆く人々が、それを見張っていました。先にそこへ降りて入った人は、洗いの後、嘆くのをやめたからです。5:9 この体の癒やしのひな型は、霊の癒やしを前もって歌っていました。肉のものは、いつも霊のもののひな型として先立つ、という形によってです。こうして、神の恵みが人々のうちに進むにつれ、水と天使にも、より多くのものが加わりました。5:10 かつて体の病を治していたものが、今は霊を癒やします。かつて一時の救いを生み出していたものが、今は永遠の救いを造り直します。かつて一年に一度、一人を解き放っていたものが、今は毎日、多くの民を守ります。罪を洗い流すことによって、死が消し去られるからです。5:11 もちろん、罪責が取り除かれれば、罰も取り除かれます。こうして人は、神に似る者として、神のもとに回復されることになります。人は、もとは神のかたちのとおりの者でした（創世記一・二六）。かたちは姿において、似ることは永遠性において量られます。5:12 というのも、人は、かつて神の息によって受け、その後、罪によって失った、あの神の霊を、取り戻すのです（創世記二・七）。

6:1 水の中で聖霊を受けるというのではありません。水の中で天使のもとに清められて、聖霊を迎える備えをするのです。ここでも、ひな型が先立ちました。ヨハネが主の先駆けとなって、その道を備えたのです（ルカ一・七六）。6:2 同じように、洗礼の天使も立会人として、後から臨まれる聖霊のために、罪を洗い流す

ことで道をまっすぐにします。その洗い流しは、父と子と聖霊とにおいて封印された信仰が得るものです（マタイ二八・一九）。三人の証人によって、すべての言葉が立つのです（マタイ一八・一六）。まして、わたしたちは、祝福によって、信仰の立会人であり、救いの保証人でもある同じ方々を持っています。それなら、神の御名の数そのものも、わたしたちの望みの確かさのために十分ではありませんか。6:3 信仰の証言と救いの保証とは、三つの方のもとに担保として差し出されます。そうであれば、教会のことも必ず言い添えられます。三つの方、すなわち父と子と聖霊のおられるところには、教会があるからです。教会は、三つの方の体なのです。

7:1 それから、洗いから上がると、わたしたちは祝福された油を塗られます。これは古い教えから来たものです。その教えにより、人々は祭司職において、角から油を注がれるのが習わしでした。アロンがモーセから油を注がれて以来のことです（レビ八・一二）。そこから、アロンは、油注ぎ（クリスマ）にちなんで、油注がれた者（クリストゥス）と呼ばれます（レビ四・五）。この油注ぎが、霊のものとなって、主にキリストという名を与えたのです。主は、父なる神から霊によって油を注がれたからです。使徒行伝にこうあるとおりです。『まことに、この都に集まり、あなたから油を注がれた聖なる子に逆らった』（使徒四・二七）。7:2 わたしたちの場合も同じです。油は肉において流れますが、霊において効き目を表します。洗礼そのものの行いも、そうです。水に沈められるという行いは肉のものですが、罪から解き放たれるという効き目は霊のものです。

8:1 次に、手が置かれます。その手は、祝福によって聖霊を呼び求め、招くのです。たしかに人の工夫でも、水オルガンでは、息を水の中に呼び込むことが許されるでしょう。そして、上から手を当てて、その両方を一つの体にしたものを、別の、これほど澄んだ息で生かすことが許されるでしょう。それなのに、神には、ご自分の楽器で、聖なる手によって霊の高い調べを奏でることが許されない、というのでしょうか。8:2 これもまた、古い秘儀から来たものです。ヤコブは、ヨセフから生まれた孫のエフライムとマナセの頭に手を置いて祝福しましたが、そのとき手を入れ違えました（創世記四八・一三〜一四）。しかも、その手は互いに斜めに交差して、キリストをかたどっていました。そうして、すでにそのとき、キリストにおいて来るべき祝福を前もって示していたのです。8:3 そのとき、あのいと聖なる霊が、清められ祝福された体の上に、喜んで父のもとから降って来られます。そして、洗礼の水の上に、かつての座を見いだすようにして、とどまり休まれます。霊が鳩の姿で主の上にお降りになったのも（マタイ三・一六）、素直さと潔白の動物によって、聖霊の本性が示されるためでした。鳩は、体のつくりでも、胆汁そのものを持たないのです。8:4 ですから、主は『はとのように素直であれ』と言われます（マタイ一〇・一六）。これも、先立つひな型の裏づけなしに言われたのではありません。というのも、洪水の水によって、昔の不義は清められました。その洪水の水の後、言ってみれば世界の洗礼の後、天の怒りがやんだ平和を、鳩が告げ知らせる者として地に告げました。鳩は箱舟から放たれ、オリブを持って戻ってきたのです（創世記八・八〜一一）。このしるしは、異邦人のあいだでも平和を表すものとして掲げられています。霊の効き目も、それと同じ配置に従います。地、すなわちわたしたちの肉が、古い罪の後に洗いから上がってくると、聖霊の鳩が飛んで来て、神の平和をもたらすのです。鳩は天から遣わされます。このひな型では、教会が、前もって示された箱舟なのです。8:5 しかし、世界はまた罪を犯しました。その点では、洗礼を洪水にたとえるのはふさわしくないでしょう。それで、世界は火に定められているのです（第二ペテロ三・七）。洗礼の後に罪をまた新たにする人も、同じです。このことも、わたしたちへの戒めのしるしとして受け取らなければなりません。

洗礼について　9〜12章　水のひな型、ヨハネの洗礼、使徒たちの洗礼

9:1 それでは、どれほど多くのものが、水の宗教を整えてきたことでしょう。自然の後ろ盾、恵みの特権、教えの儀式、ひな型、前もって築かれた土台、祈りです。まず、民がエジプトから解き放たれて自由になり、水を渡ってエジプトの王の力を逃れました。そのとき、水は王そのものを、その全軍とともに滅ぼしたのです（出エジプト一四・二七〜二八）。9:2 洗礼の秘儀に、これよりはっきりしたひな型があるでしょうか。異邦人たちは、まさに水によって、世から解き放たれます。そして、かつての支配者である悪魔を、水の中に沈められたまま、後に残していくのです。また、水は苦さという欠陥から、甘さという自分の益へと、モーセの木によって癒やされます（出エジプト一五・二五）。9:3 あの木はキリストでした。キリストは、以前は毒され苦かった本性の流れを、ご自身から癒やされました。そして、まことに健やかな水、すなわち洗礼の水に変えてくださったのです。民について行く岩から流れ出ていたのも、この水です（第一コリント一〇・四）。9:4 岩がキリストなのですから、疑いもなく、わたしたちは、洗礼がキリストのうちにある水によって祝福されるのを見ているのです。神と神のキリストのもとで、水の恵みは、洗礼を確かなものとするために、どれほど大きいことでしょう。キリストは、いつも水とともにおられます。ご自身も水で浸されます（マタイ三・一六）。婚礼に招かれたときには、ご自分の力の最初のわざを、水によって始められます（ヨハネ二・七〜九）。教えを語られるときには、渇く者を、ご自分の永遠の水へ招かれます（ヨハネ七・三七〜三八）。愛についてお教えになるときには、貧しい者に差し出された一杯の水を、愛のわざの一つとして認められます（マタイ一〇・四二）。井戸のそばで力を取り戻し（ヨハネ四・六）、水の上を歩き（マタイ一四・二五）、好んで海を渡り（マタイ九・一）、弟子たちに水を注いで仕えられます（ヨハネ一三・五）。9:5 洗礼の証しは、受難にまで続きます。十字架に引き渡されるとき、水が居合わせます。ピラトの手が、それを知っています（マタイ二七・二四）。傷つけられるとき、水がわき腹からほとばしり出ます。兵士の槍が、それを知っています（ヨハネ一九・三四）。

10:1 洗礼の宗教を築き上げるすべての事柄については、わたしたちの乏しい力の許すかぎり語りました。今からは、その残りのありさまへ、同じように力の及ぶかぎり進み、いくつかの小さな問いを取り上げましょう。ヨハネが告げた洗礼は、すでにそのとき問いを抱えていました。その問いは、主ご自身がパリサイ人たちに出されたものです。その洗礼は天のものか、それとも地のものか、という問いです（マルコ一一・三〇）。10:2 彼らは、これにはっきり答えることができませんでした。信じていなかったので、理解もしていなかったからです。けれども、わたしたちの信仰は小さく、理解もそれだけ小さいとはいえ、こう判断することはできます。その洗礼は、たしかに神からのものでしたが、それは神の命令によるのであって、神の力によるのではありませんでした。ヨハネが主からこの務めに遣わされたと、わたしたちは読んでいるからです（ヨハネ一・六）。けれども、その洗礼は、ありさまにおいては人間のものでした。10:3 というのも、その洗礼は天のものを何も与えず、ただ天のもののために先立って仕えていたからです。それは悔い改めをつかさどるもので、悔い改めは人の力のうちにあります。現に、律法学者とパリサイ人は、信じようとしなかったので、悔い改めもしませんでした（ルカ七・三〇）。10:4 悔い改めが人間のものなら、その洗礼も、必ず同じありさまのものだったはずです。もし天のものであったなら、聖霊も罪のゆるしも与えたでしょう。しかし、神おひとりのほかには、罪をゆるすことも、霊を授けることもできません（マルコ二・七）。10:5 主ご自身でさえ、まずご自分が父のもとに上らなければ、霊は降って来ない、と言われました（ヨハネ一六・七）。主がまだ授けておられなかったものを、しもべが与えられるはずはありません。このように、のちに使徒行伝にも、ヨハネの洗礼を受けていた人々が、聖霊を受けていなかったとあります。彼らは聖霊のことを、聞いたことさえ

なかったのです（使徒一九・二）。10:6ですから、天のものをもたらさなかったその洗礼は、天のものではありませんでした。それどころか、ヨハネの中にあった天のもの、すなわち預言の霊でさえ、すっかり衰えてしまいました。霊のすべてが主に移った後のことです。ヨハネは、ある方を宣べ伝え、その方が来られるのを指し示していました。それなのに、のちに人を遣わして、あなたがその方なのかと尋ねさせたほどです（マタイ一一・二〜三）。10:7こうして、悔い改めの洗礼は、いわば候補者として行われていたのです。キリストのうちに続いて来るゆるしと、聖とされることとを待ち望む者です。というのも、ヨハネが、罪のゆるしへと向かう悔い改めの洗礼を宣べ伝えていたのは（マルコ一・四）、来るべきゆるしについて告げたものなのです。悔い改めが先に行き、ゆるしが後に続くからです。これが、道を備えるということです。備える者は、自分で仕上げる者ではありません。ほかの者が仕上げるように、手はずを整えるのです。10:8ヨハネは、天のものは自分のものではなく、キリストのものだと言い表しています。彼はこう言うのです。『地から出る者は、地のことを語る。上から来る者は、すべてのものの上にある』（ヨハネ三・三一）。また、自分は悔い改めのために浸すだけで、霊と火とによって浸す方が、まもなく来られる、とも言います（マタイ三・一一、ルカ三・一六）。10:9つまり、まことの、揺るがない信仰は、水で浸されて救いに至るからです。偽りの、弱い信仰は、火で浸されて裁きに至るのです。

11:1「でも見よ、主は来られたのに、浸すことはなさらなかった。わたしたちは、こう読んでいるのだから。『しかし、このかたみずからが浸しておられたのではなく、その弟子たちであった』（ヨハネ四・二）」と、彼らは言います。まるで、主がご自分の手でお浸しになると、ヨハネが本当に宣べ伝えていたかのような言い方です。11:2もちろん、そう理解すべきではありません。これは、ただ世の常の言い方で言われたのです。たとえば、「皇帝が布告を掲げた」とか、「長官が棒で打った」とか言います。では、皇帝が自分で布告を掲げるのでしょうか。長官が自分で打つのでしょうか。11:3いつも、行う者と言われるのは、人がその下で仕えている、その人のほうです。ですから、『このかたは、おまえたちをお浸しになるであろう』という言葉も（マタイ三・一一）、そう受け取るべきでしょう。このかたによって浸される、あるいはこのかたへと浸される、という意味です。けれども、主がご自身では浸すことをなさらなかったことに、だれもつまずいてはなりません。11:4というのも、主は、何へとお浸しになればよかったのでしょうか。悔い改めへでしょうか。それなら、何のために先駆けが要ったでしょう。罪のゆるしへでしょうか。主は、それを言葉によって与えておられました（マタイ九・二）。ご自身へでしょうか。主は、へりくだりによって、ご自身を隠しておられました。聖霊へでしょうか。聖霊は、まだ父のもとから降っていませんでした（ヨハネ七・三九）。11:5教会へでしょうか。教会は、まだ使徒たちが建てていませんでした。ですから、主の弟子たちが、仕える者として浸していたのです。先にヨハネが先駆けとして浸したのと同じです。それは、同じヨハネの洗礼でした。ほかの洗礼だと、だれも考えてはなりません。のちのキリストの洗礼のほかに、ほかの洗礼はないからです。キリストの洗礼は、そのときにはまだ、弟子たちが授けることのできないものでした。主の栄光がまだ満ちておらず、洗いの効き目も、受難と復活によってまだ整えられていなかったからです。わたしたちの死は、主の受難によらなければ解かれず、いのちも、主の復活なしには取り戻されないのです。

12:1さて、洗礼なしにはだれにも救いはない、と定められています。とくに、主のあの宣言によってです。主は、『だれでも、水から生れなければ、いのちを持たない』と言われました（ヨハネ三・五）。すると、ある人々の、こまごまとした、いや向こう見ずな、蒸し返しの論が持ち上がります。この定めによるなら、使徒たちに、どうして救いがあるのか、というのです。主のもとで浸されたと書かれているのは、パウロのほかにいないからです。12:2そればかりか、使徒たちのうちキリストの洗礼を着たのは、パウロだけです（ガラテヤ三・二七、使徒九・一八）。それなら、キリストの水を欠くほかの者たちは危うい、とすでに決まっていて、それで定めが保たれるのか。それとも、浸されていない者にも救いが定められているなら、定めのほうが破られるのか。そう問うのです。12:3主が証人です。わたしはこうしたことを、実際に耳にしたのです。わたしが、ほかの人を思い悩ませることを、筆の気ままから自分で考え出すほど、堕落した者だと思われたくはありません。そして今、使徒たちが浸されたことを否む人々に、

できるかぎり答えましょう。12:4 使徒たちは、人間のものであるヨハネの洗礼を受けていて、主の洗礼を望んでいたとしましょう。そうであれば、主ご自身が、洗礼は一つだと定めておられたのです。主は、洗っていただくのを拒んだペテロに、こう言われたのです。『一度洗った者は、もう一度洗う必要はない』（ヨハネ一三・一〇）。浸されていない者に、主がそんなことを言われるはずはまったくありません。これは、使徒たちからヨハネの洗礼まで取り去って、水の秘儀を壊そうとする人々に対する、あらわな証拠です。12:5 主の道は全世界に開かれるべきで、そのために使徒たちが定められていたのです。その使徒たちの身に、そのとき主の道、すなわちヨハネの洗礼が備えられていなかった、などということが信じられるでしょうか。12:6 主ご自身は、何の悔い改めも負っておられないのに、浸されました。それなら、罪びとには、その必要がなかったというのでしょうか。ですから、浸されなかった者たちがいたとしても、それはキリストの供の者たちではありませんでした。信仰に敵対する者たち、すなわち律法学者とパリサイ人でした（ルカ七・三〇）。12:7 そこからも、次のことが察せられます。主に逆らう者たちは、浸されるのを拒みました。それなら、主に従っていた者たちは浸されていて、自分たちに敵対する者たちと同じ考えではなかったのです。とくに、彼らが付き従っていた主が、ヨハネを証しによって高く上げられたのですから、なおさらです。主はこう言われました。『女の産んだ者の中で、バプテスマのヨハネより大きい人物は起らなかった』（マタイ一一・一一）。12:8 ほかに、かなり無理に、こう持ち込む人々もいます。使徒たちは、舟の中で波をかぶって水に覆われたとき（マタイ八・二四）、洗礼の代わりを果たしたのだ。ペテロも、海の上を歩いたときに、十分に水に沈んだのだ（マタイ一四・二九〜三〇）、というのです。12:9 けれども、わたしの考えでは、海の激しさに水をかけられたり、のみ込まれかけたりするのは、一つのことです。宗教の教えに従って浸されるのは、別のことです。それに、あの舟は教会のひな型を示していました。教会は海、すなわち世において、波、すなわち迫害と試みに揺さぶられます。主は忍耐して、眠っておられるかのようです。そして終わりのときに、聖徒の祈りによって起こされ、世を静めて、ご自分の者たちに静けさをお返しになるのです。12:10 さて、使徒たちは、何らかの仕方で浸されたのかもしれません。あるいは、洗われないままでいたのかもしれません。その場合は、一つの洗いについての主のあの言葉も、ペテロの身を借りて、わたしたちにだけ向けられたことになります。どちらにせよ、彼らの救いについて判断するのは、まったく向こう見ずです。というのも、使徒たちは、最初に選ばれ、それ以来離れずに親しく交わりました。その特権だけでも、彼らに洗礼の近道を与えることができたでしょう。わたしの考えでは、彼らは、信じる者にはだれにでも救いを約束なさった、あの方に従っていたのですから。12:11 主は、『あなたの信仰があなたを救った』と言われ（マルコ一〇・五二）、また『あなたの罪はゆるされた』と言われました（ルカ七・四八）。信じる者に言われたのであって、浸された者にではありません。もしこの信仰が使徒たちに欠けていたのなら、次の人々が何を信じてそうしたのか、わたしには分かりません。ある者は、主のただ一言に促されて、収税所を捨てました（マタイ九・九）。ある者は、父と舟と、暮らしを支えていた仕事を捨てました（マタイ四・二一〜二二）。ある者は、父の葬りを顧みず（マタイ八・二一〜二二）、主のあの最高の戒めを、聞く前に果たしていました。『わたしよりも父または母を重んじる者は、わたしにふさわしくない』という戒めです（マタイ一〇・三七）。

洗礼について　13〜17章　信仰と洗礼、一つの洗礼、血の洗い、洗礼を授ける者

13:1 そこで、あの極悪の者たちは、問いを持ち出します。「信仰で足りる者には、洗礼は必要ではない。アブラハムも、水の秘儀によらず、ただ信仰の秘儀によって、神に喜ばれたのだから」と、彼らはこうまで言うのです。13:2 しかし、どんなことでも、後のものが締めくくり、続くものが先立つものにまさるのです。以前、主の受難と復活の前には、裸の信仰によって救いがあったとしましょう。けれども、信仰が増し加わって、主の誕生と受難と復活を信じるようになると、秘儀に広がりが加えられました。洗礼による封印です。それは、いわば信仰の衣です。信仰は、以前は裸でしたが、今では自分の掟なしには何もできません。13:3 浸すことの掟が課され、その形が定められたからです。主は言われます。『行って、国民を教え、父と子と聖霊との名によって、彼らを浸しなさい』（マタイ二八・一九）。この掟に、あの宣言が結び合わされました。『だれでも、水と霊とから生れなければ、神の国にはいることはできない』（ヨハネ三・五）。この宣言が、信仰を、洗礼が必要だということに結びつけたのです。13:4 こうして、それ以来、信じる者はみな浸されていました。パウロも、そのとき、信じると浸されました（使徒九・一八）。主は、パウロの目を奪ったあの打撃のときに、このことをお命じになっていたのです。主は言われました。『さあ立って、ダマスコにはいって行きなさい。そうすれば、そこであなたのなすべき事が告げられるであろう』（使徒九・六、二二・一〇）。すなわち、浸されることです。それだけが、パウロに欠けていたのです。ほかのことなら、パウロは、ナザレ人が主であり、神の子であると、もう十分に学び、信じていました（使徒二二・八）。

14:1 ところが、彼らは、ほかならぬ使徒自身の言葉を持ち出して、蒸し返します。『キリストがわたしをつかわされたのは、浸すためではない』（第一コリント一・一七）。まるで、この論拠で、洗礼が取り去られるとでもいうようです。それなら、なぜ、パウロはガイオとクリスポと、ステパナの家の者たちを浸したのでしょうか（第一コリント一・一四、一六）。14:2 もっとも、たとえキリストが、浸すためにパウロをお遣わしにならなかったとしても、です。それでも、ほかの使徒たちには、浸すようお命じになっていました。けれども、これは、そのときのありさまに応じて、コリント人に書き送られたことです。彼らのあいだに、分裂と争いが起きていたからです。ある者はパウロに、ある者はアポロに、すべてを帰していたのです（第一コリント一・一二）。14:3 そのために、平和を重んじる使徒は、浸すためではなく、宣べ伝えるために遣わされたと言ったのです。すべてを自分のものとして言い張っていると、見られないためでした。というのも、宣べ伝えるのが先で、浸すのは後だからです。だから、まず宣べ伝えられたのです。けれども、わたしの考えでは、宣べ伝えることを許された者には、浸すことも許されていたのです。

15:1 洗礼の論争について、ほかに何か取りざたされていることがあるかどうか、わたしは知りません。ただ、先に省いたことを、ここで改めて取り上げましょう。省いたのは、差し迫った考えの筋を、途中で断ち切ると思われないためでした。わたしたちにとって、洗礼はまったく一つです。主の福音からも（ヨハネ一三・一〇）、使徒の手紙からも、そう言えます。神は一つ、洗礼は一つ、天にある教会も一つだからです（エペソ四・四〜六）。15:2 けれども、異端者については、何を守るべきかを、よく検討しておくのがふさわしいでしょう。あの定めは、わたしたちに向けて出されたものだからです。異端者は、わたしたちの教えに何のあずかりもありません。彼らがよそ者であることは、交わりを取り上げられたことそのものが、はっきり証ししています。15:3 わたしは、彼らのうちに、主がわたしにお命じになったものを認めるべきではありません。わたしたちと彼らとでは、神が同じではなく、キリストも一人、すなわち同じではないからです。ですから、洗礼も一つではありません。同じではないからです。彼らは洗礼を正しく持っていないのですから、疑いもなく、持っていないのです。持たれ

ていないものは、数に入れることができません。ですから、彼らは洗礼を受けることもできないのです。持っていないからです。15:4 しかし、このことについては、すでにギリシア語で、もっと詳しく論じておきました。ですから、わたしたちは一度だけ洗いに入り、一度だけ罪が洗い流されます。罪は繰り返されてはならないからです。一方、ユダヤ人であるイスラエルは、毎日洗います。毎日汚れるからです。15:5 わたしたちのうちでも、同じことが繰り返し行われないように、一つの洗いについての定めがあるのです。さいわいなのは、一度だけ洗い清める水です。その水は、罪びとたちのもてあそびものにはなりません。汚れが重なって染まり、洗い流した人々を、また汚すこともないのです。

16:1 たしかに、わたしたちには第二の洗いもあります。これも一つで、血の洗いです。主は、すでに浸されておられたのに、この洗いについて、『わたしには、浸されるべきバプテスマがある』と言われました（ルカ一二・五〇）。主は、ヨハネが書いたとおり、水と血とをとおって来られたからです（第一ヨハネ五・六）。それは、水で浸され、血で栄光をお受けになるためでした。また、そのようにして、わたしたちを、水によって召された者、血によって選ばれた者とするためでした。16:2 主は、この二つの洗礼を、刺し貫かれたわき腹の傷から流し出されました（ヨハネ一九・三四）。主の血を信じる者が水で洗われ、水で洗われた者が血をも飲むためです。これこそ、まだ受けていない洗いの代わりとなり、失った洗いを取り戻させる洗礼です。

17:1 この小さな題材を締めくくるために、残っていることがあります。洗礼を授けることと受けることについて、守るべきことも思い起こさせることです。授ける権利は、最高の祭司、すなわち監督が持っています。次に、長老と執事も持っていますが、監督の権威によらなければなりません。教会の誉れのためです。それが保たれてこそ、平和が保たれるのです。17:2 このほか、信徒にも権利があります。等しく受けるものは、等しく与えることができるからです。その場に監督も長老も執事もいないなら、弟子である信徒たちが呼ばれるのです。主の言葉は、だれも隠してはならないのです。17:3 ですから、洗礼も、等しく神の財であって、すべての人が執り行うことができます。しかし、信徒には、恥じらいと慎みの教えが、どれほど強く求められていることでしょう。監督のものと定められた務めを、自分のものにしてはならないのです。そうした務めは、上に立つ人々にふさわしいものなのですから。17:4 監督の職をめぐる張り合いは、分裂の母です。このうえなく聖なる使徒は、すべてのことは許されているが、すべてのことが益になるわけではない、と言いました（第一コリント六・一二、一〇・二三）。つまり、必要なとき、場所か時か人の事情に迫られるときに、あなたがその務めを用いるだけで、十分としなさい。17:5 というのも、危うい人の事情が差し迫っているときには、助ける者が臆せず手を出すことは、認められるのです。助ける者は、自由にできたことを果たさずにすませるなら、失われた人について罪ある者となるからです。けれども、教えることを横取りした厚かましい女も、まさか浸す権利まで自分のものにすることはないでしょう。もし、以前の獣に似た新しい獣が現れるなら、話は別ですが。つまり、あの女が洗礼を取り去っていたように、ある女が自分の手で洗礼を授ける場合です。17:6 パウロの名で誤って書かれたものが、テクラの例を持ち出して、女が教え、浸すことを許す根拠にしています。それなら、それを持ち出す人々は、次のことを知っておくべきです。アジアで、その書を作った長老がいました。彼は、自分のものを積み足して、パウロの名声を増そうとするかのように書いたのです。しかし、罪を明らかにされて、パウロへの愛からしたのだと告白し、その職を退きました。17:7 というのも、パウロは、女には臆せずに学ぶことさえ許しませんでした。その人が、女に教える権限と浸す権限とを与えたなどということが、どうして本当らしく思われるでしょうか。彼は、『黙っていなければならない』、また『家で自分の夫に尋ねるがよい』と言っています（第一コリント一四・三四〜三五）。

洗礼について　18〜20章　洗礼を延ばすこと、洗礼の日、洗礼の備え

18:1 ところで、洗礼を軽々しく委ねてはならないことは、それを務めとする人々が知っています。『あなたに求める者には与えてやり』という言葉には、施しにかかわる、それに固有の名目があります（ルカ六・三〇）。むしろ、次の言葉のほうを、よく考えるべきです。『聖なるものを犬にやるな。また真珠を豚に投げてやるな』、また『軽々しく手をおいてはならない。また、ほかの人の罪に加わってはいけない』（マタイ七・六、第一テモテ五・二二）。18:2 ピリポは、あれほどたやすく宦官を浸しました。それなら、そこには主の明らかな、際立ったお計らいが働いていたことを思い返しましょう。霊は、ピリポに、その道を進んで行くようお命じになっていました（使徒八・二六）。宦官のほうも、怠けていない者として見いだされました。にわかに浸されたいと思い立った者でもありません。祈るために神殿へ出かけ、神の聖書がその身に深く刻まれていたのです（使徒八・二七〜二八）。神がみずから進んで使徒を遣わされた者は、そのような姿で見いだされるべきでした。霊は、その使徒に、宦官の馬車に寄り添うよう、再びお命じになりました（使徒八・二九）。すると、宦官の信仰にかなう聖句が、ちょうどよいときに現れます。使徒は請われて、馬車に迎え入れられます（使徒八・三一〜三三）。主のことが示され、信仰はためらわず、水を待つこともありません。使徒は、務めを果たすと、連れ去られます（使徒八・三五〜三九）。18:3 パウロも、たしかにすぐに浸されました（使徒九・一八）。宿の主人シモン[1]が、パウロが選びの器と定められていることを、すぐに知ったからです（使徒九・一五）。神がお計らいになるときには、前もってそのしるしが送られます。けれども、どんな願いも、人を欺くことがあり、また欺かれることもあるのです。18:4 ですから、それぞれの人の境遇と心構えに応じて、また年齢によっても、洗礼をためらうほうが益になります。とくに、幼い子供たちについてはそうです。洗礼がそれほど急ぐ必要のないものなら、保証人までも危険に巻き込む必要が、どこにあるでしょうか。保証人も、死によって約束を果たせなくなることがあります。また、子供の悪い生まれつきが育つにつれて、裏切られることもあるのです。18:5 たしかに、主は『わたしのところに来るのをとめてはならない』と言われます（マタイ一九・一四）。それなら、彼らは、成長していくあいだに来るがよい。学んでいるあいだに、どこへ来るのかを教えられているあいだに、来るがよい。キリストを知ることができるようになってから、キリスト者になるがよい。18:6 罪を知らない年ごろが、どうして罪のゆるしへと急ぐのでしょうか。世の事柄でなら、人はもっと用心して事を運びます。それなのに、地上の財産を委ねられない者に、神のものは委ねるというのでしょう。彼らは、救いを求めることを知るがよい。そうすれば、あなたは、求める者に与えたと見られるでしょう。18:7 同じほどの理由で、結婚していない人々も、先に延ばすべきです。彼らには試みが備えられているからです。おとめには年ごろになったことで、やもめには夫のない身であることで、試みが待ち構えています。結婚するか、節制のうちに固められるまで、待つべきです。18:8 洗礼の重さを悟る人々なら、受けることのほうを、延ばすことよりも恐れるでしょう。欠けのない信仰は、救いについて安心していられるのです。

19:1 洗礼に、いっそう厳かな日を与えるのは、過越です。そのとき、わたしたちがそれによって浸される主の受難も、成し遂げられたからです。次のことを、ひな型として解いても、ふさわしくないことはないでしょう。主は、最後の過越を行おうとされたとき、弟子たちを準備に遣わして、『水がめを持っている男に出会うであろう』と言われました（マルコ一四・一三）。主は、過越を祝う場所を、水というしるしによってお示しになったのです。19:2 それに続いて、五旬節の五十日は、洗いを執り行うのに最も喜ばしい期間です。そのあいだに、主の復活は弟子たちのあいだでたびたび示され（使徒一・三）、聖霊の恵みが初めて授けられました（使徒二章）。主の来臨の望みも、ほのめかされました。主が天に迎え入れられたとき、天使たちが使徒たちに、主は天に上られたのと同じ有様

で、また来られると言ったからです（使徒一・一一）。それは、まさに五旬節の五十日のうちのことでした。19:3しかも、エレミヤが『わたしは彼らを地の果から集める、祭りの日に』[2]と言うとき、それは過越の日と五旬節の日を指しています（エレミヤ三一・八）。五旬節の日こそ、本来の祭りの日なのです。とはいえ、どの日も主のものです。どの時も、どんな時期も、洗礼にふさわしいのです。厳かさには違いがあっても、恵みには何の違いもありません。

20:1洗礼に入ろうとする人々は、たびたびの祈りと、断食と、膝をつくことと、徹夜とによって祈らなければなりません。また、それまでのすべての罪を告白しなければなりません。ヨハネの洗礼をも、身をもって表すためです。『自分の罪を告白しながら、浸された』と言われています（マタイ三・六）。20:2わたしたちが今、自分の不義や恥ずべき行いを公に告白するなら[3]、喜ぶべきです。というのも、わたしたちは、肉と霊の苦しい戦いによって、かつての罪の償いをしているからです。同時に、これから来る試みに備えて、前もって守りを築いているのです。20:3主は『試みに陥らないように、目をさまして祈っていなさい』と言われます（マタイ二六・四一）。そして、わたしの考えでは、弟子たちが試みられたのは、眠り込んだからです。そのために、彼らは捕らえられた主を見捨てました。主のそばに踏みとどまり、剣を使った者さえ、三度も主を否んだのです（ヨハネ一八・一〇、一七、二五～二七）。試みを受けない者は、だれも天の御国に至らない、と前もって言われていたからです。20:4主ご自身も、洗いの後すぐ、四十日の断食を終えられたところで、試みに取り囲まれました（マタイ四・一～二）。「それなら、わたしたちも、洗いの後には、むしろ断食すべきだ」と、人は言うでしょう。けれども、だれがそれを禁じるでしょうか。禁じるとすれば、喜ばずにはいられないことと、救いを祝うことだけです。20:5しかし主は、わたしの見るかぎり、イスラエルのひな型にある非難を、イスラエル自身に向け返されたのです。というのも、民は海を渡り、荒野に移されました。四十年のあいだ、そこで神の豊かな糧に養われながら、それでも神よりも、腹と食い意地のほうを覚えていたのです（民数記一一・四～五）。20:6それに続いて主は、水の後、荒野に離れて四十日の断食を終えられました。そして、神の人はパンによってではなく、神の言葉によって生きることを示されました（マタイ四・四）。また、満腹と腹の際限のなさに結びついた試みは、食を控えることによって打ち砕かれることも、お示しになったのです。20:7ですから、神の恵みが待ち受けている、祝福された人々よ。あなたがたは、新しい誕生の、あのいとも聖なる洗いから上がってきます。そして初めて、母である教会のもとで、兄弟たちと共に祈りの手を広げます。そのときには、父に求めなさい。主に求めなさい。恵みの財と、賜物の分け与えが、あなたがたに備わるように、と。20:8主は『求めよ、そうすれば、与えられるであろう』と言われます（マタイ七・七）。あなたがたは捜して、見いだしたのです。門をたたいて、開けていただいたのです。ただ、お願いします。あなたがたが求めるとき、罪びとテルトゥリアヌスのことも、覚えていてください。

訳注

1 『ユダ』と読む古い刊本や、『アナニヤ』と直す案もある。

2 『祭りの日に』は、ギリシア語訳にだけある句。

3 古い刊本はみな『公に告白しないなら』と読む。

小品集

2026年11月23日版
著者　テルトゥリアヌス
制作　藤遥
発行　christian-classics-jp
公開　https://christian-classics-jp.github.io/site/tertullian-treatises/
原稿　https://github.com/christian-classics-jp/site/tree/master/books/tertullian-treatises
全文を、ラテン語原文（Ad martyras, De spectaculis, De oratione, De baptismo）からAIを使って翻訳しました。
訳文はCC0 1.0で公開しています。引用した聖書の本文は含みません。